

## 中野好夫著作目録

---

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

12

(開始ページ / Start Page)

443

(終了ページ / End Page)

502

(発行年 / Year)

1986-03-13

# 中野好夫著作目録

\* \*  
 タイトルは、発表後変更された場合のものを含む。  
 ○印の数字は、『中野好夫集』全十一巻（筑摩書房刊）に収められたものの巻数を示す。

一九二九（昭和四）年 二十六歳

此頃の演劇雑誌 「文藝都市」一九二九年二月号

一九三一（昭和六）年 二十八歳

サミュエル・バトラー 「詩と詩論」一九三二年十二月号

一九三二（昭和七）年 二十九歳

スウィフトと「ガリヴァー旅行記」 「文藝」一九三二年一月号  
 ジェイ・ビー・プリーストリ 「小説」一九三三年五月号

《ユリシーズ》（岩波版）について「文学」一九三二年七月号

年六月号

T・S・エリオットと英国加特力主義 「文学」一九三二年十二月号

一九三三（昭和八）年 三十歳

アメリカのHamlet: Henry Adams 「英文学研究」第十三卷二号 一九三三年四月  
 知性の無為 「行動」一九三三年十一月号

一九三四（昭和九）年 三十一歳

英国現代文学と諷刺 「文藝評論」一九三四年六月号  
 『パニヤン』（英米文学評伝叢書12、研究社、一九三四年七月刊）

はしがき

- I バニヤンと彼の時代
  - II 誕生から結婚まで
  - III 結婚から悔改めまで
  - IV 悔改めから監禁まで
  - V 第一回の監禁
  - VI 「溢るる恩寵」その他
  - VII 出獄から再び監禁まで
  - VIII 「天路歷程」
  - IX 「悪太郎の一生」と「聖戦」
  - X 晩年・死
  - XI 人・文学・名声
- 漱石と英文学 「浪漫古典」一九三四年九月号 ⑤
- 一九三五（昭和十）年 三十二歳
- 諷刺は遁走するか 「帝大新聞」一九三五年五月  
 行動心理説と文学 「改造」一九三五年十二月号
- 一九三六（昭和十一）年 三十三歳
- 意慾を孕む文学 「新潮」一九三六年六月号 ①

- 文学の社会性と超個性文学 「文学界」一九三六年九月号
- 翻訳問題への不満 「新潮」一九三六年十一月号
- 一九三七（昭和十二）年 三十四歳
- イギリス文学の性格と特徴 「新潮」一九三七年四月号
- △文化月報▽海外文学―イギリス 「文学界」一九三七年四月号
- △文化月報▽海外文学―イギリス文学 「文学界」一九三七年五月号
- ドリンク・ウォーターのこと 「学燈」一九三七年六月号
- △文化月報▽海外文学―「F6峰登攀」 「文学界」一九三七年七月号
- 英国現代劇が暗示する一つの問題 「三田文学」一九三七年九月号
- 英米に於ける文学理論の展望 「国語と国文学」一九三七年十月号
- 『英米文学辞典』（編、研究社、一九三七年十月刊）

進歩の跛行 「思想」一九三七年十一月号

ハ文化月報Vハクスレー何処へ行く 「文学界」一九三七年十一月号

一九三八(昭和十三)年 三十五歳

詩劇の問題 「英語青年」第七十八卷七号 一九三八年一月

アメリカ聯邦劇場の報告 「文学界」一九三八年一月号

英文学に現はれた英国国民性 「思想」一九三八年一月号

エリザベス朝演劇講話 「英語青年」第七十九卷一

一十二号 一九三八年四月—九月 ⑤  
ごまめのはぎしり 「東大英文学会会報」一九三八年五月

各論—Shakespeare: King Henry the Fourth 「英語青年」第七十九卷五号 一九三八年六月

日本の文学の性格 「福岡日々新聞」一九三八年六月

エイチ・ジー・ウエルズ 「廿世紀思想、進化主義」

一九三八年七月

英米文学閑談 「文藝」一九三八年十月号  
シェイクスピアの横顔 「文藝」一九三八年十月号

⑤  
イギリス戦争小説の性格 「セルパン」一九三八年十一月号

英米文学スポットライト 「作品」一九三八年十一月号

仮構と事実について 「新潮」一九三八年十一月号

一九三九(昭和十四)年 三十六歳

知識人のある傾向について 「思想」一九三九年二月号

⑤  
戦争文学の性格 「理想」一九三九年二月号

バイロン雜藁 「新潮」一九三九年三月号  
文化評論誌の運命 「文体」一九三九年五月号

批評精神の職能 「中央公論」一九三九年六月号  
読書くり言 「東京堂月報」一九三九年六月号 ①

イギリス文学と外来文化 「文藝」一九三九年七月号 ⑤

善意の文学について 「新潮」一九三九年八月号

⑤

新聞論 「新女苑」一九三九年八月号

学生論 「新女苑」一九三九年九月号

戸川さんの姿勢 「英語青年」第八十一卷十二号

一九三九年九月

英国初期人文主義と母国語問題 「思想」一九三九年

年十二月号

一九四〇（昭和十五年）年 三十七歳

日本語についての感想 「新潮」一九四〇年一月号

①

歴史と教養 「文学界」一九四〇年一月号

フォールスタッフの方法その他 「文藝」一九四〇年

一月号

文学と宣伝その他 「文藝」一九四〇年二月号

文学と政治その他 「文藝」一九四〇年三月号

△洋書評論▽英国のユダヤ人問題（M・G・マーチン）

「改造」一九四〇年時局増刊号4 11三月

早春独語 「学友会雑誌」（東京女子大学々友会）第

二十号 11一九四〇年三月

文学らしい文学を 「新潮」一九四〇年五月号 ①

女の大学——東京女子大を観て—— 「新女苑」一

九四〇年六月号

顔と感想 「新潮」一九四〇年八月号

『アラビアのロレンス』（岩波書店、一九四〇年九月刊）

序にかへて

青年考古学者

沙漠の叛乱

沙漠の叙事詩

闘争と孤独

訳語と日本語 「改造」一九四〇年十二月号

一九四一（昭和十六）年 三十八歳

アメリカのハムレット 「改造」一九四一年一月号

孤高の精神 「中央公論」一九四一年三月号

批判 「新女苑」一九四一年三月号

エッセイ 『新文学講座——文学のジャンル』（河出

書房、一九四一年三月刊）

二つの文学 「中央公論」一九四一年四月号

青年に与ふ 「英語青年」第八十五卷二号 一九四一年四月

武者小路実篤論覚書 「文学界」一九四一年五月号

ロレンスのことなど 「文藝」一九四一年七月号

文章の精神 「新女苑」一九四一年七月号

隣組長の反省 「改造」一九四一年十月号時局版23

講壇文学者と作家 「新潮」一九四一年十月号

一九四二(昭和十七)年 三十九歳

「ガリヴァ旅行記」 「文藝」一九四二年一月号

生への興味 「英語青年」第八十六卷八号 一九四二年一月

政治家と回想録 「文藝」一九四二年五月号

エリザベス朝劇場と歌舞伎劇場 「演劇」一九四二年六月号

Eugene O'Neillと異教主義(一)―(四) 「英文学研究」第二十二卷三、四号 一九四二年六月、十月、第二十三卷一、三号 一九四三年一月、七月

眞の勇者 「新女苑」一九四二年七月号

日本文学報国会外国文学部会について 「英語青年」

第八十七卷八号 一九四二年七月

精神を鍛へるもの 「新女苑」一九四二年八月号

古典の精神 「新女苑」一九四二年九月号

歴史文学論に関して 「新潮」一九四二年九月号

露伴の史伝小説 「赤門文学」一九四二年十月号

①

大和古寺その他 「新女苑」一九四二年十月号

K・Hに答へる 「英語青年」第八十八卷二号 一九四二年十月一日

九四二年十月一日 「英語青年」第八十八卷二号 一九四二年十月一日

直言する 「英語青年」第八十八卷二号 一九四二年十月十五日 一九四三年二月

昔話の姿 「新女苑」一九四二年十一月号

紅茶のあと 「新女苑」一九四二年十二月号 ⑧

ささやかな感想 「新潮」一九四二年十二月号

鷗外の問題 「現代文学」一九四二年十二月号

第一回大東亜文学者会議 「教育」一九四二年十二月号

一九四三(昭和十八)年 四十歳

進歩の観念について 「文藝」一九四三年一月号

一九四三(昭和十八)年 四十歳

進歩の観念について 「文藝」一九四三年一月号

詩に高まる心 「新女苑」一九四三年一月号

『文学評論集』（中央公論社、一九四三年一月刊）

英米に於ける文学理論の展望（一九三七・十）

イギリス文学と外来文化（一九三九・七）⑤

英国現代劇が暗示する一つの問題（一九三七・九）

英吉利文学の性格と特徴（一九三七・四）⑤

行動心理説と文学（一九三五・十二）

英米文学閑談（一九三八・十）

一、アメリカ的性格

二、シェイクスピアの横顔

善意の文学について（一九三九・八）⑤

知識人のある傾向に就て（一九三九・二）⑤

西欧戦争文学の性格（一九三九・二、一九三八・十）

一）

エッセイ（一九四一・三）

スウィフトと「ガリヴァー旅行記」（一九三二・一、

一九三九・十二）

バイロン雑蘖（一九三九・三）

サミュエル・バトラー（一九三一・十二）

エイチ・ヂー・ウエルズ（一九三八・七）

ジェイ・ビー・プリーストリ（一九三二・五）

孤高の精神（一九四一・三）

二つの文学（一九四一・四）

フォールスタッフの方法その他（一九四〇・二）

文学と宣伝その他（一九四〇・三）

文学と政治その他（一九四〇・三）

批評精神の職能（一九三九・六）

意欲を孕む文学（一九三六・六）①

仮構と事実について（一九三八・十二）

日本語についての感想（一九四〇・二）①

一、擬声語について

二、専門語の日常性について

日本的文学の性格（一九三八・六）

文学の社会性と超個性文学（一九三六・九）

諷刺文学について（一九三五・五、一九三四・六）

あとがき

樋口一葉のこと 「新女苑」一九四三年二月号 ⑧

聖徳讃仰 「新女苑」一九四三年三月号

文化の把握 「新女苑」一九四三年四月号 ①

働く女たちの姿 「新女苑」一九四三年五月号

新生活様式の構想について 「文学界」一九四三年

五月号

翻訳文学（大正・昭和時代） 『新日本文学講座』――

近代日本文学研究（小学館、一九四三年五月刊）

運命の感触 「新女苑」一九四三年六月号

真の勇者 「新女苑」一九四三年七月号

女子と学問 「新女苑」一九四三年九月号

British Imperialismの基底 「英語青年」第八十九

卷九号 一九四三年九月

大学教育の在り方 「文学界」一九四三年十月号

決戦一策・勤労と報国 「文学報国」一九四三年十

一月号

ペンと剣と 「文藝」一九四三年十一月号

森鷗外 「文学界」一九四三年十一月号――一九四四

年一月号

一九四四（昭和十九）年 四十一歳

阿片戦争と望厦条約 「英語青年」第九十卷六号

一九四四年六月

一九四五（昭和二十）年 四十二歳

夏炉冬扇 「新潮」一九四五年一月号

明日を担うもの 「藝苑」一九四五年九月号

文化再建の首途に 「新生活」一九四五年十一月号

①

一九四六（昭和二十一年）年 四十三歳

蠅打器の必要 「新小説」一九四六年一月号 ①

デマ乱れ飛ぶ 「太平」一九四六年一月号

戦後の女性とその結婚への道 「婦人画報」一九四

六年一月号

英語関係者に望む 「英語青年」第九十二卷一号

一九四六年一月

秋声の描く女 「季刊文学」一九四六年二月号

アメリカ思潮と文学 「人間」一九四六年二月号

迷訳ばなし 「改造」一九四六年二月号 ①

文藝批評以前の問題 「書評」一九四六年一月創刊号

賄賂時代 「サンデー毎日」一九四六年二月十日号

高校生と校長 「サンデー毎日」一九四六年二月十

七・二十四日合併号

明るい希望の光 「婦人朝日」一九四六年三月号



- ①  
 ① こんな場合 「小天地」一九四六年三月号  
 ② 歴史に学ぶ 「新生活」一九四六年三月号  
 ③ 私小説と私小説論 「時論要解」一九四六年三、四月号  
 ④ 諷刺文学序説 「文藝」一九四六年三・四月合併号、五月号  
 ⑤ クライティーリオン 「知と行」一九四六年四月号  
 ⑥ 安井哲子先生のこと 「新潮」一九四六年四月号  
 ⑦ アメリカの文学 「英語青年」第九十二卷四号  
 ⑧ 九四六年四月  
 ⑨ 教師待遇論 「潮流」一九四六年五月号  
 ⑩ ド・トクヴィル「アメリカの民主主義」 「世界」一九四六年五月号  
 ⑪ 割拠性が癌 「サンデー毎日」一九四六年五月十二日号  
 ⑫ 迷訳ばなし後日 「世界文学」一九四六年五・六月合併号  
 ⑬ 家族制度と家族主義 「女性改造」一九四六年六月号
- ①  
 ① 軍学校復員学徒のこと 「小天地」一九四六年六月号  
 ② ブラウニングの恋愛論 「女性」一九四六年六月号  
 ③ 日本精神是非 「英語青年」第九十二卷六号  
 ④ 四六年六月  
 ⑤ 家出したノラ 「女性改造」一九四六年七月号  
 ⑥ 再建日本と国語の問題 「新生活」一九四六年七月号  
 ⑦ 道徳の復活 「婦人画報」一九四六年七月号  
 ⑧ 文学者と戦争責任 「小天地」一九四六年八月号  
 ⑨ 新しい文化、新しい女性 「婦人文庫」一九四六年八月号  
 ⑩ 若い世代におくる 「新潮」一九四六年八月号  
 ⑪ 夫婦の愛情 「婦人春秋」一九四六年九月号  
 ⑫ 小泉八雲 「展望」一九四六年九月号  
 ⑬ 巨星墜つ——H・G・ウェルズを惜しむ 「サンデー毎日」一九四六年九月一日号  
 ⑭ 個人の完成ということ 「ソレイユ」一九四六年十月号  
 ⑮ 月第二輯  
 ⑯ 小林秀雄 「新小説」一九四六年十月号

怒りの文学 「人間」一九四六年十月号

『反省と出発』（中央文化社、一九四六年十月刊）

文化反省の要件（一九四六）①

われわれの民主主義（一九四六）①

権利と責任（一九四六）①

若い人々のために（一九四六）①

軍学校復員学徒のこと（一九四六・六）

地方文化の意義（一九四六）①

文化再建の首途に（一九四五・十二）①

歴史に学ぶ（一九四六・三）①

こんな場合（一九四六・三）①

迷訳ばなし（一九四六・二）①

読書くり言（一九三九・六）①

書評について（一九三九）

英語流行の落穂（一九四三）

偶然の神秘について（一九三七）

デマ乱れ飛ぶ（一九四六・一）

西園寺さんが来てやで（一九四〇）①

八角時計（一九四三）①

安井先生のこと（一九四六・四）②

著者のことば

ウエルズと「来るべき世界の姿」 「新潮」一九四六

年十一月号

H・G・ウエルズについて 「世界」一九四六年十一

月号

時評から批評へ 「新生」一九四六年十二月号

△書評▽林達夫「歴史の暮方」 「展望」一九四六年

十二月号

横光利一「旅愁」 「書評」一九四六年十二月号

義理と人情 「女性改造」一九四六年十二月号

一九四七（昭和二十二年）年 四十四歳

風と共にゆく 「新女苑」一九四七年一月号

秋声と「あらくれ」 「婦人朝日」一九四七年一月号

文学的でない一つの感想 「近代文学」一九四七年

一月号

文学の世界性と世界文学 「文藝」一九四七年一月

号

Shakespeareの心理的技巧 「英語青年」第九十三

卷一号＝一九四七年一月

教養の精神について 「婦人文庫」一九四七年二月号

ルネサンス人シェイクスピア 「改造」一九四七年

二月号 ⑤

苦難を通じて星の高きを 「民主文化」一九四七年

二・三月合併号 ①

近代文学の運命 「世界」一九四七年三月号 ⑤

八・一五以後の知識人 「文藝春秋」一九四七年三

月号 ①

石川淳「かよひ小町」 「人間」一九四七年四月号

シェイクスピア管見 「批評」第九卷一号||一九四七

年四月

私小説論再説 「進路」一九四七年四・五月合併号

徳田秋声 「藝苑」一九四七年五月号

宮本百合子と平林たい子 「女性改造」一九四七年

五月号

思想と寛容 「文藝」一九四七年六月号

一つの疑い 「思索」一九四七年秋季号||九月

『教養と文化』（平凡社、一九四七年九月刊）

家出したノラ（一九四六・七）

風と共にゆく（一九四七・一）

義理と人情（一九四六・十二）

ブラウニングの恋愛論（一九四六・六）

教養の精神について（一九四七・二）

新しい文化、新しい女性（一九四六・八）

個人の完成ということ（一九四六・十）

道徳の復活（一九四六・七）

明るい希望の光（一九四六・三） ①

家族制度と家族主義（一九四六・六） ①

戦後の女性とその結婚への道（一九四六・一）

夫婦の愛情（一九四六・九）

樋口一葉のこと（一九四三・二） ⑧

文化の把握（一九四三・四） ①

運命の感触（一九四三・六）

真の勇者（一九四三・七）

『エリザベス朝演劇講話』（新月社、一九四七年九月刊）

⑥

まえがき

第一講 エリザベス朝演劇の成立まで

『ゴードラック』と『ガートン婆さま縫い針

奇譚』

第二講 エリザベス朝演劇の完成（一）

キッドの『スペイン悲劇』

第三講 エリザベス朝演劇の完成（二）

- マールロウの『マルタ島のユダヤ人』
- 第四講 エリザベス朝演劇の完成(三)  
デカールの『靴屋の祭日』
- 第五講 エリザベス朝演劇の完成(四)  
シェイクスピアの『ヘンリー四世』
- 第六講 転換期のエリザベス朝演劇(一)  
ベン・ジョンソンの『錬金術士』
- 第七講 転換期のエリザベス朝演劇(二)  
ポーモント、フレッチャーの『王にして王ならず』
- 第八講 転換期のエリザベス朝演劇(三)  
ターナーの『復讐者の悲劇』  
ウェブスターの『白魔』
- 第九講 転換期のエリザベス朝演劇(四)  
ヘイウッドの『親切なくで殺された女』
- 第十講 頽廢期のエリザベス朝演劇(一)  
マシンジャーの『新案旧債償却法』
- 第十一講 頽廢期のエリザベス朝演劇(二)  
ミドルトンの『取り替え子』
- 第十二講 頽廢期のエリザベス朝演劇(三)  
ジョン・フォードの『傷心』

- 付録 エリザベス朝劇場と歌舞伎劇場  
作家と反省 「文明」一九四七年十月号  
文学のカタルシス 「世界文学」一九四七年十月号  
[E. S. STOLL]の方法 「英語青年」第九十三卷九号  
号一九四七年十月
- 『文学試論集 二』(要書房、一九四七年十月刊)
- 近代文学の運命(一九四七・三) ⑤  
文学の世界性と世界文学(一九四七・二)  
諷刺文学序説(一九四六・三―五) ①  
進歩の観念について(一九四三・二)  
ルネサンス人シェイクスピア(一九四七・二) ⑤  
怒りの文学(一九四六・十)  
H・G・ウエルズについて(一九四六・十一)  
ウエルズと「来るべき世界の姿」(一九四六・十二)  
クライテイーリオン(一九四六・四) ⑤  
迷訳ばなし後日(一九四六・五―六) ①  
文学的でない一つの感想(一九四七・二)  
秋声の描く女(一九四六・二)  
私小説と私小説論(一九四六・三、四)  
森鷗外(一九四三・十一―一九四四・一)  
露伴の史伝小説(一九四二・十) ①

小泉八雲（一九四六・九）

小林秀雄（一九四六・十）

時評から批評へ（一九四六・十二）

蠅打器の必要（一九四六・一）①

エリザベス朝劇場と歌舞伎劇場（一九四二・六）

翻訳文学（一九四三・五）

あとがき

自己暴露が文学であるか 「文藝」一九四七年十一月号

藝術に於ける近代精神 「藝術」V号 一九四七年十二月

昭和二十二年文学の問題 「人間」一九四七年十二月号

戦後文学一九四七 「新文学」一九四七年十二月号

伝統の否定について 「文藝」一九四七年十二月号

藝術に於ける近代精神 「藝術」一九四七年十二月号

選挙演説落第記 「別冊サンデー毎日」一九四七年十二月十日号①

一九四八（昭和二十三）年 四十五歳

近代小説とその可能的未来 「群像」一九四八年一月号

月号

二十世紀と十九世紀 「改造」一九四八年一月号

短歌も文学である 「文藝」一九四八年一月号

既婚者との恋愛 「新女苑」一九四八年三月号

目的と手段 「世界評論」一九四八年三月号①

SHAKESPEARE研究への道 「英語青年」創刊

五十周年記念号 一九四八年四月

Maugham: "Then and Now" 「英文学研究」第

二十五巻第一 一九四八年四月

アメリカ文化管見 「潮流」一九四八年五月号

オニール論 「近代文学」一九四八年五月号

イギリス・ルネサンスの明暗 「近代思想」第二号

一九四八年六月⑤

頼もしきマキャベリスト 「文藝春秋」一九四八年

六月号①

市河三喜氏に答へる 「英語青年」第九十四巻六号

一九四八年六月

アメリカ文学の意味 「風雪」一九四八年七月号

文芸時評 「文藝」一九四八年七月号

翻訳論私考 「展望」一九四八年七月号①

寸言集 「文藝春秋」一九四八年七月号—一九四九年四月号

志賀直哉と太宰治 「文藝」一九四八年八月号

公約数的性格 「文藝」一九四八年九月号

私小説の系譜 『新文学講座』第二卷（新潮社、一九四八年九月刊）

新聞失格 「文藝」一九四八年十月号

世代論余滴 「新文学」一九四八年十月号 ①

土井晩翠 「望郷」一九四八年十月号

怒りの花束 『怒りの花束』（海口書店、一九四八年十月刊） ①

『怒りの花束』（海口書店、一九四八年十月刊）

怒りの花束（一九四八・十） ①

八・一五以後の知識人（一九四七・三） ①

酸っぱい葡萄（一九四八） ①

星の高きを（一九四七・二—三） ①

自覚と行動について（一九四六） ①

一つの言葉<sup>ロゴス</sup>

川路聖謨のことども

歴史の皮肉 ①

一つの疑い（一九四七・九）

僕婢奉公訓抄

偶感一束

教師待遇論（一九四六・五） ①

官僚につける薬（一九四七） ①

諷刺雑感（一九四六）

反省と行動

労働組合の封建性

寛容と懐疑と ①

天皇の地方巡幸 ①

急坂をよじ登る ①

選挙演説落第記（一九四七・十二・十） ①

床屋政談

言語と社会（一九四七）

再建日本と国語の問題（一九四六・七）

翻訳解禁（一九四七）

性の倫理（一九四七） ①

恋愛の解放とデカダン（一九四八）

あとがき

『英米文学論』（酣燈社、一九四八年十月刊）

序文

英国の文化（一九四〇）

英文学に現はれた英国国民性（一九三八・一）

英国初期人文主義と母国語問題（一九三九・十二）

シェイクスピア管見（一九四七・四）

中世・文芸復興期演劇（一九四一）

戦後文学と大戦の影響（一九三三）

リアリズムの再検討（一九三九）

知識人のある傾向に就いて（一九三九・二） ⑤

漱石と英文学（一九三四・九） ⑤

アメリカ文学講座（一九四七）

ピューリタニズムとアメリカ文学（一九四八）

アメリカのハムレット（一九四一・二）

世界市民と民族 「評論」一九四八年十一月号

小説「霧の中」（田宮虎彦） 「朝日評論」一九四八

年十一月号

文学とところどころ 「世界文化」一九四八年十一月

号

編輯者失格 「文藝」一九四八年十一月号

戦後派失格 「文藝」一九四八年十二月号

一九四九（昭和二十四）年 四十六歳

アメリカ文学の予言性 「アメリカ文学」一九四九年一月号

文学と米英国民 『新制高等学校 学生と英語』（鐵

社、一九四九年一月刊）

新聞とラジオ 「女性改造」一九四九年二月号

一つの告白——告白の必要について 天皇制について

平和について 国家主権と民族意識について

「新潮」一九四九年二月号、六月号 ①

現代フランス小説と英国小説 「フランス文学」一

九四九年三月号

コモン・センスについて 「文学界」一九四九年三

月号

求める神・語らぬ神 「展望」一九四九年三月号

⑤

偽善について 「新文学」一九四九年三・四月合併

号 ①

短歌の不安定性 「短歌研究」一九四九年四月号

平林たい子論 「人間」一九四九年四月号

大衆小説雑感 「改造文藝」一九四九年第四号 五

月 ②

プチ・プロポ 「世界文学」一九四九年六月号

新制大学批判 「塔」一九四九年七月号 ②  
文学に憑かれることその他 「文藝公論」一九四九年七月号

三つの再出発 「中央公論」一九四九年七月号  
シェイクスピアとその時代 「シェイクスピア研究」

(研究社、一九四九年七月刊)

『南極のスコット』(梟文庫14、小山書店、一九四九年八月刊)

- 一 水原にはためく黒い旗
- 二 南の果てへ
- 三 計画成る(「テラノヴァ」号出発)
- 四 基地における一年
- 五 一路極地へ、スコット消息を絶つ
- 六 日記は語る
- 七 英雄の死
- 八 スコットという人

あとがき

悪人礼賛 「新潮」一九四九年十月号 ②  
毛沢東を讃う 「潮流」一九四九年十月号  
極地への情熱 「あるびよん」一九四九年十月号  
ハムレット試写を見ながらの感想 「キネマ旬報」

一九四九年十月号

大学教授と税金 「文藝春秋」一九四九年十一月号 ②

恋愛意識過剰症について 「新女苑」一九四九年十一月号

今年のお回顧 「新日本文学」一九四九年十二月号

西郊断想 「新小説」一九四九年十二月号

最初の世界市民 「増刊文藝春秋」第二号 一九四九年十二月 ⑦

△アトム▽ 「サンデー毎日」一九四九年十二月十八日号

一九五〇(昭和二十五)年 四十七歳

新しい世界をめざして 「女性線」一九五〇年一月号

党人、羊ならずんば 「サンデー毎日」一九五〇年

一月二十二日号  
アメリカのハムレット 「展望」一九五〇年二月号 ⑥

試験ということ 「中央公論」一九五〇年二月号



新聞岡目八目 「新潮」一九五〇年二月号

近代文学史におけるポー 「詩学」一九五〇年二・

三月合併号

『風と共に去りぬ』の社会的背景 「なにを読むべき

か」一九五〇年二・三月合併号

アメリカ留学生への註文 「人間」一九五〇年三月号

二つのこと 「展望」一九五〇年三月号

アメリカ文学とヨーロッパ文学 作品——演劇

『現代世界文学講座』イギリス・アメリカ編（編著、

新潮社、一九五〇年三月刊）

アメリカ文学・イギリス文学・大陸文学 「風雪」

一九五〇年四月号

ポカホンタスのことなど 「評論」一九五〇年四月号

BLINDEN 先生と伊東の碑のこと 「英語青年」第

九十六卷四号—一九五〇年四月

浪曼主義 『哲学講座』第五卷（筑摩書房、一九五

〇年四月刊）

露伴の史伝について 『露伴全集』第十六卷（岩波

書店、一九五〇年四月刊）月報

イギリス近代文学の成立 「文学」一九五〇年五月

号

△アトム▽ 「サンデー毎日」一九五〇年五月十四

日号

井伊大老のこと 「展望」一九五〇年六月号

「一九八四年」 「文学界」一九五〇年六月号

「市民の名誉権」 「日本評論」一九五〇年六月号

海に憑かれた男 「増刊文藝春秋」第四号—一九五

〇年六月

△アトム▽予断の危険 「サンデー毎日」一九五〇

年七月三十日号

学生運動をめぐって 「世界」一九五〇年八月号

ジャーナリズム 「展望」一九五〇年八月号 ②

八千万人の抗議 「中央公論」一九五〇年八月号

モーム 「藝術新潮」一九五〇年八月号

ロミオとジュリエット 「婦人公論」一九五〇年九

月号

△アトム▽貞操観念 「サンデー毎日」一九五〇年

十月二十二日号

序説—十九世紀と二十世紀 『二十世紀の課題』（日

本放送出版協会、一九五〇年十月刊）

ロレンスと生命主義 『ロレンス研究』(「ロレンス  
選集」別冊、編著、小山書店、一九五〇年十二月刊)  
語学屋の葬儀 「展望」一九五〇年十二月号  
△紙上裁判・チャタレイ事件▽ロレンスなる人物

「新潮」一九五〇年十二月号

一つの試み 「図書」一九五〇年十二月号

ゲーテの言葉 「図書」一九五〇年十二月臨時特集  
号

一九五一(昭和二十六)年 四十八歳

文学者の政治的発言 「世界」一九五一年一月号

②

近頃ホンヤク雑感 「雄鶏通信」一九五一年一月号

△展望▽ 「展望」一九五一年一月号

学者という集団の愚劣さ 「文藝春秋」一九五一年

二月号

市民としての生き方を 「信濃教育」第七七〇号

一九五一年二月

国民のいない政治 「中央公論」一九五一年三月号

②

トロフィーモフについて 「世界」一九五一年三月

号 ②

英国的な地味な味い 「映画評論」一九五一年三月

号

『文学の常識』(要書房、一九五一年三月刊)

はしがき

文学の多様性

文学の三つの条件

文学を成り立たせるもの ③

文学における模写と表現

文学の基盤としての「人間」への興味(一)

文学の基盤としての「人間」への興味(二)

文学と道徳

近代小説の起源と発達

付録 どんな文学作品を読むべきか

『文庫』乱戦時代 「毎日情報」一九五一年四月号

国営アベック場を 「新女苑」一九五一年四月号

大学教授の雑文稼ぎ 「新潮」一九五一年四月号

②

機械時代と文学 『文学講座』第五卷(筑摩書房、一

九五一年四月刊)

△日本の顔・15▽清水幾太郎 「日本評論」一九五一年五月号

言論の自由 「日本評論」一九五一年五月号 ②

言葉の魔術 「新潮」一九五一年五月号 ②

私の信条 「世界」一九五一年五月号 ②

自殺者 「新女苑」一九五一年五月号

漱石の諦観 「文藝」一九五一年五月号

ハッピー・エンドの喜劇 「人間」一九五二年五月号

疲れたよき人々 「新女苑」一九五一年六月号

日共が創る英雄 「新潮」一九五一年六月号

市民社会の成立と文学 史上の文学者―シェイク

スピア 『文学講座』第二卷(筑摩書房、一九五一年六月刊)

盲目批評 「新潮」一九五一年七月号

役者としての政治家 「演劇」一九五一年七月号

②

『良識と寛容』(河出書房、一九五一年七月刊)

私の信条 (一九五一年・五) ②

思想と寛容 (一九四七・六)

悪人礼讃 (一九四九・十) ②

目的と手段 (一九四八・三) ①

言論の自由 (一九五一年・五) ②

市民的反抗 (一九五〇・八)

文学者の政治的発言 (一九五一年・二) ②

ジャーナリズム (一九五〇・八) ②

国民のいない政治 (一九五一年・三) ②

講和問題 (一九五〇・七)

軍事基地の問題 (一九五〇・七)

天皇制について (一九四九・二) ①

平和について (一九四九・二)

国家主権と民族意識 (一九四九・六)

学生運動への希望 (一九四九・八)

学生運動をめぐって (一九五〇・八)

新制大学批判 (一九四九・七) ②

学者という集団の愚劣さ (一九五一年・二) ②

大学教授の雑文稼ぎ (一九五一年・四) ②

利巧者の計算 「新潮」一九五一年八月号

下請右旋回とジャーナリズム 「中央公論」一九五一年八月号

一年八月号

近代ロマン主義の文学 ルネサンスの文学―シェイク

クスピアの時代 『世界の文学』(編、毎日新聞社、

一九五二年八月刊)

岳父晩翠を語る 「詩界」第二号 一九五二年九月

鬼が棲むか蛇が棲むか 「新潮」一九五二年九月号

柱時計 「文藝春秋」一九五二年九月号

ローマ殺人事件 「オール読物」一九五二年九月号

⑦

平和を保証せぬ安全保障 「世界」一九五二年十月

号 ②

読者からの手紙を読んで 「世界」一九五二年十一月号

月号

妻を語る 「週刊朝日」一九五二年十一月十八日号

自由主義者の哄笑 「文藝春秋」一九五二年十二月

号 ②

知識人の立場 「改造」一九五二年十二月号 ②

小さな灯も消さずに 「地上」一九五二年十二月号

基督教界への直言 「ニューエイジ」一九五二年十一月

二月号

クリスマスと正月 「新大阪新聞」一九五二年十二月

月三十一日

一九五二(昭和二十七年)年 四十九歳

ピカソ・マチスがわからなければ教養を疑われるか

「新女苑」一九五二年一月号

現代の危機と終末観 「世界」一九五二年二月号

②

異常心理映画の流行 「文藝」一九五二年二月号

荒畑寒村氏に答う 「世界」一九五二年三月号

自由のための闘い 「群像」一九五二年三月号 ②

平和論の憂鬱 「文藝春秋」一九五二年三月号 ②

三度びチャタレイ問題について 「文藝」一九五二年

年三月号

『私の平和論』(要書房、一九五二年三月刊)

序文

自由主義者の哄笑(一九五二・十二) ②

私の平和論(一九五二・三) ②

知識人の立場(一九五二・十二) ②

平和を保証せぬ安全保障(一九五二・十) ②

下請右旋回とジャーナリズム(一九五二・八)

役者としての政治家(一九五二・七) ②

日共が創る英雄（一九五一・六）

盲目批評（一九五一・七）

言葉の魔術（一九五一・五）②

利巧者の計算（一九五一・八）

自由のための闘い（一九五二・三）②

世界市民としての自覚（一九四九）

寸言集（一九四八・七一―一九四九・四）

“むしろ占領の継続を択ぶ”ということ 「中央公論」

一九五二年四月号②

Macbeth の新訂本二つ 「英語青年」第九十八卷

四号 一九五二年四月

道義破壊の責任を負うもの 「世界」一九五二年五

月号

戦後文学における人間像の問題 「文学」一九五二

年六月号

漱石寸感 「明治・大正文学研究」一九五二年六月

号

イギリス映画の風格 「映画評論」一九五二年七月

号

イギリス人のものの考え方 「あるびよん」一九五

二年七月号

『世界文学史概説』（編、河出書房、一九五二年七月刊）

教科書と私の文章 「文学」一九五二年八月号

日本文学―わがベスト5 「別冊文藝春秋」第二十

九号 一九五二年八月

雪原の決闘者 「文藝春秋」夏の増刊・第三十卷十二

号 一九五二年八月

『文学試論集 三』（東京大学出版会、一九五二年八月

刊）

市民社会の成立と文学（一九五一・六）

浪漫主義（一九五〇・四）

機械時代と文学（一九五一・四）

私小説の系譜（一九四八・九）

イギリス近代文学の成立（一九五〇・五）

イギリス・ルネサンスの明暗（一九四八・六）⑤

現代フランス小説と英国小説（一九四九・三）

平林たい子論（一九四九・四）

大衆小説雑感（一九四九・五）②

求める神 語らぬ神（一九四九・三）⑤

トロフィーモフについて（一九五一・三）②

ロレンスと生命主義（一九五〇・十一）

漱石と英文学（一九三四・九）⑤

あとがき

イギリスの保守主義 「世界」一九五二年九月号

大学教授という名の人間 「改造」一九五二年十月

号

スタンバーグのひととき 「オール読物」一九五二

年十月号

ルポルタージュ文学について 「中央公論」一九五

二年臨時増刊・秋季文芸特集号(11月) ②

眞実は作られるものか 「文藝春秋」臨時増刊・第

三十卷十八号11一九五二年十二月

土井晩翠と私 「文藝春秋」一九五二年十二月号

②

一九五三(昭和二十八)年 五十歳

ある悲喜劇役者 「新潮」一九五三年一月号 ⑦

感想二つ 「世界」一九五三年一月号

具体的な作品批評を 「新日本文学」一九五三年一

月号

重役諸君への警告 「文藝春秋」一九五三年二月号

②

沙漠の叛乱 「新潮」一九五三年二月号

芸術と自由 「文学界」一九五三年二月号

土井晩翠の思い出 「英語青年」第九十九卷二号11

一九五三年二月

岡目八目 「サンデー毎日」一九五三年二月十五日

号

教授では食えぬ 「週刊朝日」一九五三年二月十五

日号

蒼龍窟 「新潮」一九五三年三月号 ⑦

恐るべき児 「新潮」一九五三年四月号 ⑦

大学教授始末記 「文藝春秋」一九五三年四月号

②

労働問題と国民 「改造」一九五三年四月号

八〇〇〇万人の不信任 「改造」一九五三年四月増

刊号

旧版自由学校 「東大教養学部報」一九五三年四月

何を恐怖すべきか 「世界」一九五三年五月号

媒妁結婚と恋愛結婚 「婦人公論」一九五三年五月

号

一粒の麦 「新潮」一九五三年五月号 ⑦

資本主義のアザといインチキ 「平和」一九五三年

五月号

文学・人間・社会 「文学」一九五三年六月号

血の決算報告書 「新潮」一九五三年六月号 ⑦

学者の妻 「婦人公論」一九五三年六月号

学園から公園へ 「サンデー毎日」一九五三年六月

七日号

狂言と殉教 「新潮」一九五三年七月号 ⑦

広場日記 「群像」一九五三年七月号

汚された道義性 「婦人公論」一九五三年七月号

「新聞に出た」ということ 「婦人公論」一九五三年

八月号

世界最悪の旅 「新潮」一九五三年八月号 ⑦

聖者と悪魔 「新潮」一九五三年九月号 ⑦

人間の名において 「平和」一九五三年九月号

わたしの書斎 「図書」一九五三年九月号

裏切られた革命 「新潮」一九五三年十月号

あとがき 「平和」一九五三年十月号

文学者の社会的発言をめぐって 「文学」一九五三

年十月号

最近の反米感情 「文藝春秋」一九五三年十一月号

李ラインの皮肉 「キング」一九五三年十一月号

スポーツランド・楽園 「世界」一九五三年十一月

号

「伸子」から「二つの庭」へ 「文学界」一九五三年

十一月号

北方の悍婦 「新潮」一九五三年十一月号 ⑦

あとがき 「平和」一九五三年十一月号

選評 「多磨」一九五三年十一月号

文学と政治 『岩波講座文学1』（岩波書店、一九

五三年十一月刊）

芽月十六日・熱月九日 「新潮」一九五三年十二月

号 ⑦

志賀直哉と太宰治 「文藝」一九五三年十二月号

反米映画といわれる「赤線基地」の問題点 「婦人

公論」一九五三年十二月号

あとがき 「平和」一九五三年十二月号

一九五四（昭和二十九）年 五十一歳

あとがき 「平和」一九五四年一月号

モームの歩んだ道 『サマセット・モーム研究』（編、

英宝社、一九五四年一月刊）

現代と「世代」の問題 「世界」一九五四年二月号  
こんごの問題―松川判決の感想 「改造」一九五四年  
二月号

あとがき 「平和」一九五四年二月号

犯罪心理 「文藝」一九五四年二月号

新米編集者の弁 「図書」一九五四年二月号

日本の政治はこれでよいか 「文藝春秋」臨時増刊・

第三十二卷二十号 一九五四年二月

『世界史の十二の出来事』（新潮社、一九五四年二月  
刊）

悲喜劇役者ラッサール（一九五三・二）⑦

沙漠の叛乱（一九五三・二）

蒼龍窟（一九五三・三）⑦

悪魔ウィルクス（一九五三・四）⑦

一粒の麦（一九五三・五）⑦

血の決算報告書（一九五三・六）⑦

狂言と殉教（一九五三・七）⑦

世界最悪の旅（一九五三・八）⑦

聖者と悪魔（一九五三・九）⑦

裏切られた革命（一九五三・十）

北方の悍婦（一九五三・十一）⑦

芽月十六日・熱月九日（一九五三・十二）⑦

今月のことば 「平和」一九五四年三月号

アメリカ感傷旅行 「文藝春秋」一九五四年五月号

川崎長太郎を告発す 「文学界」一九五四年五月号

アメリカの日本人 「ニュー・エイジ」一九五四年  
五月号

五月号

ポカホンタス 「婦人公論」一九五四年五月号

平和は空論ではない 「平和」一九五四年五月号

池の蛙と子供たち 「文藝」一九五四年六月号 ②

あとがき 「平和」一九五四年六月号

△新女性に関する十二章▽職業 「週刊朝日」一九  
五四年六月六日号

ハミルトン夫人

「週刊朝日」（別冊）一九五四年  
六月十日号

六月十日号

序文「悲憤の島オキナワの記録」 沖縄県学生会編

『祖国なき沖繩』（日月社、一九五四年六月刊）

憲法記念日について 「平和」一九五四年七月号

風前雨後 「西日本新聞」一九五四年七月二十二日

―十月二十五日 ②

『人間の名において』（東京大学出版会、一九五四年七  
月刊）



憲法七年（一九五四・七）

汚された道義性（一九五三・七）

赤線基地の問題点（一九五三・十二）

最近の反米感情（一九五三・十一）

李ラインの皮肉（一九五三・十二）

アメリカ感傷旅行（一九五四・五）

アメリカの日本人（一九五四・五）

池の蛙と子供たち（一九五四・六） ②

大学教授という名の人間（一九五二・十）

重役諸君への警告（一九五三・二） ②

大学教授始末記（一九五三・四） ②

広場日記（一九五三・七）

資本主義のアザトイインチキ（一九五三・五）

きのう、きょう（一九五三・六・十六―十二・二十九）

真実はつくられるものか（一九五二・十二）

人間の名において（一九五三・九）

私の信条（一九五一・五） ②

あとがき

世論は果して無力か 「新潮」一九五四年八月号

丸もうけの余生 「文藝春秋」一九五四年八月号

②

『文学的人間像』（『現代日本評論選』第十二巻、桑原

武夫『プラグマチストの感想』と併録、筑摩書房、

一九五四年八月刊）

女の虚栄心は花の香 「新女苑」一九五四年九月号

被災民族のねがい 「平和」一九五四年九月号

『中野好夫 河盛好蔵 桑原武夫集』（『現代随想全集』

第二十巻、創元社、一九五四年十月刊）

一九五五（昭和三十）年 五十二歳

中南米というところ（一）国連三分の一の実力 「サ

ンデー毎日」一九五五年二月六日号

中南米というところ（二）サーベルが物いう国々

「サンデー毎日」一九五五年二月十三日号

中南米というところ（三）漫々的でたらめ選挙 「サ

ンデー毎日」一九五五年二月二十日号

中南米というところ（四）一等車と四等車の社会

「サンデー毎日」一九五五年二月二十七日号

中南米というところ（五）物やり、主義の独裁者

「サンデー毎日」一九五五年三月六日号

中南米というところ（六）化学者に絞殺されたチリ

- 「サンデー毎日」一九五五年三月十三日号  
 中南米というところ(七)アメリカの兵站基地 「サ  
 ンデー毎日」一九五五年三月二十日号  
 中南米というところ(八)軍隊という名の「私兵」  
 「サンデー毎日」一九五五年三月二十七日号  
 半年ぶりの日本で 「平和」一九五五年四月号  
 中南米というところ(九)ブラジル移民はお金持  
 「サンデー毎日」一九五五年四月三日号  
 中南米というところ(十)勝ち組にも善玉、悪玉  
 「サンデー毎日」一九五五年四月十日号  
 ある隷属国の悲劇 「世界」一九五五年五月号  
 俗流人生論 「新潮」一九五五年五月号 ②  
 あとがき 「平和」一九五五年五月号  
 望ましい「自主対策」 「サンデー毎日」一九五五  
 年五月八日号  
 血税を食いつぶすもの 「サンデー毎日」一九五五  
 年五月二十九日号  
 お茶くみと封建性 「熊本日日新聞」一九五五年五  
 月三十一日、「愛媛新聞」五月三十一日  
 南米チラリ拝見の記 「エコノミスト」一九五五年  
 六月号
- 九十九里にて 「平和」一九五五年六月号  
 あとがき 「平和」一九五五年六月号  
 ブラジル移民の悲劇 「サンデー毎日」一九五五年  
 六月二十六日号  
 ポカホンタス あとがき 『永遠の女性』(編、河  
 出書房、一九五五年六月刊)  
 人間、人間、そして人間を 「凶書」一九五五年七  
 月号 ②  
 もっと光を！ 「文藝春秋」一九五五年七月号  
 読書の楽しみ 「日販通信」一九五五年七月号  
 書物すいせん「地球の片隅で」 「平和」一九五五年  
 七・八月合併号  
 新しい出発にあたって 「平和」一九五五年七・八  
 月合併号  
 警察第一報主義の反省 「週刊朝日」一九五五年七  
 月三日号  
 殺人兵器の発達 「サンデー毎日」一九五五年七月  
 二十四日号  
 洋書を読み初めた頃 「学鏡」一九五五年八月号  
 余生 「新潮」一九五五年八月号  
 八・六大会のことなど 「サンデー毎日」一九五五

年八月二十一日号

翻訳論ノート 「文学」一九五五年九月号 ②

論争は現実の事実を前に…… 「平和」一九五五年

九月号

△書評▽岩波小辞典『日本文学・古典』 「図書」一

九五五年九月号

アマゾンの旅 「随筆」一九五五年九月号

金銭について 「人生」一九五五年九月号

やがて穂に出て…… 「サンデー毎日」一九五五年

九月十八日号

『現代の作家』（編著、岩波書店、一九五五年九月刊）

まえがき

志賀直哉

正宗白鳥

中野重治

里見弴

阿部知二

高見順

野間宏

佐藤春夫

井伏鱒二

武田泰淳

丹羽文雄

平林たい子

石川達三

椎名麟三

川端康成

大岡昇平

田宮虎彦

広津和郎

野上彌生子

木下順二

いやらしさの年齢 「文藝春秋」一九五五年十月号

②

一人の市民として 「新日本文学」一九五五年十月

号

事件・人物・社会 「文藝春秋」臨時増刊・第三十

三卷二十号 一九五五年十月

サンフランシスコからワシントンまで 「世界」一九

五五年十一月号

私生活のヒットラー 「学燈」一九五五年十二月号

歴史小説への注文 「文学界」一九五五年十二月号

②

一九五六(昭和三十一年)年 五十三歳

臼井君のこと 「新潮」一九五六年一月号

英文学と私 「英語青年」第一〇二卷一号―一九五

六年一月

もはや「戦後」ではない 「文藝春秋」一九五六年

二月号 ②

最後の沖繩県知事 「別冊文藝春秋」第五十号―一

九五六年三月 ⑧

鈴木社会党委員長に問う 「中央公論」一九五六年

三月号

『私の消極哲学』(中央公論社、一九五六年五月刊)

まえがき 至上の願い 死後消滅 忘却の効用

親の言い分 飛行機旅行 ところ変れど 前島さ

んの狐 サイオンジさんが来てやで 忘れえぬ

人々 犯罪と世相 悲劇の条件 ガンの恐怖 仙

石原 不幸な記念日 神話の創成 原爆に想う

群衆の心理 後手の政治 節義をまもる 悪名と

いうこと 性善悪説 ボロイ教科書 教育しない

教育(一) 教育しない教育(二) 青年の相場 現

代の寓話 偶然の神秘 もう一度偶然について

人間天皇 人物経済とは 人材更新 あまのじゃ

く 道徳と政治 智慧の書 自然と人生 九州の

旅から(一) 九州の旅から(二) 映画は好き?

あゝ太陽を! 南米出発に際し ほめられた日本

人 日本の縮図 アメリカの身の上相談 最大の

外交 坂の町霧の町 試験について 飲酒につい

て 援助はするが非介入 神様の失敗 世界見本

市 南米偽宮様事件 立小便とケンカ(一) 立小

便とケンカ(二) 小さな自画像(一) 小さな自画

像(二) 小さな自画像(三) 独裁者の最期 偽善

について 悪人礼讃 故国の評判 愛妻と恐妻

(一) 愛妻と恐妻(二) ブラジルの飲みもの(一) ブ

ラジルの食べもの(二) ブラジルの食べもの(二)

親に似る 読書分布図 羊と獅子 イワン型とア

レキセイ型 オセロ型とイアゴ型 悲観と楽観

ブラジルの季節感 選挙戦風景 鐘ヶ江さんの農

場 独りよがり ブラジルの花 天災のない国

人間の絶対値 十数粒の種子 青年よ、生意気で

あれ テコテコという飛行機 私の消極哲学 日

本的御馳走 アマゾンの裏話(一) アマゾンの裏話

(二) 芸術に関する断想(一) 芸術に関する断想

(二) 老成少年 感じのわるい宗教家(以上、一九

五四・七・二十二・二十五) ②

なぜ憲法を守るか 「平和と民主主義」(憲法擁護

国民連合発行) 一九五六年六月二十五日

遺書について 「文学界」一九五六年七月号 ③

笑う哲学者 「高知新聞」一九五六年七月二十七日

天性の喜劇作家 「信濃毎日新聞」一九五六年七月

三十一日

欺されてはならぬ 「新日本文学」一九五六年八月

号

名誉市民禍ということ 「文藝春秋」一九五六年八

月号 ③

文明嫌悪時代の文士 「別冊文藝春秋」第五十三号

⑥ 一九五六年八月

旅行記をめぐって 「中部日本新聞」一九五六年八

月八日

日本最強野球チーム 「文藝春秋」一九五六年九月

号

参院選挙について労働組合へ一言 「中央公論」一

九五六年九月号

歴史が証明する 「読売新聞」一九五六年九月十七

日

ディスカッション・クラスのことども 『斎藤勇博士

古稀記念論文集 英文学研究』(研究社出版、一九

五六年十月刊) ②

老人天国記 「産経時事」一九五六年十月十一日

私はこの眼で見た 「朝日新聞」一九五六年十月十

四日

第二、第三の砂川を恐れる 「全造船」(全日本造

船労働組合発行) 一九五六年十月三十一日

一市民としての意見 「世界」一九五六年十一月号

自由の限界 「婦人公論」一九五六年十一月号

「政治と新興宗教」をめぐって 「大世界」一九五六

年十一月号

読書はアクセサリーではない 「新女苑」一九五六年

十一月号

△風神▽ 「産経時事」一九五六年十一月二日 一

九五八年四月二十六日(週一回)

基地問題の背後にあるもの 「中央公論」一九五六

年十二月号

サーバーの新著「犬」 「学燈」一九五六年十二月号  
権力機構を操るもの 「文藝春秋」一九五六年十二  
月号  
その根は深い 「世界」一九五六年十二月号  
ぼらのへそ 「熊本日日新聞」一九五六年十二月一  
日—一九五七年三月十七日 ③  
△ことし言い残したこと▽ 「朝日新聞」一九五六  
年十二月十九日

一九五七(昭和三十二)年 五十四歳

△意見▽ 「日本読書新聞」一九五七年一月一日  
下士官根性では困る 「報知新聞」一九五七年一月  
七日  
よきかなプロ・スポーツ 「報知新聞」一九五七年  
一月二十二日  
あるスパルタ教育 「文藝春秋」一九五七年二月号  
パリの王様 「学燈」一九五七年二月号  
神と女帝を弄んだ男 「別冊文藝春秋」第五十六号  
〓一九五七年二月

『菜穂子』 「文藝」臨時増刊・第十四卷三号〓一九五

七年二月

ゴルフのために 「報知新聞」一九五七年二月七日  
水連にのぞむ 「報知新聞」一九五七年二月二十八  
日

『文学の常識』(塙書房、一九五七年二月刊)一九五  
年、要書房版の再刊)

中途半端な七球団 「報知新聞」一九五七年三月十  
一日

スポーツと国家色 「報知新聞」一九五七年三月三  
十日

世界の良心を動かす声 「北海道新聞」一九五七年  
四月十九日、「中部日本新聞」四月二十六日

序 『教師』(編、潮文社、一九五七年四月刊)

阿部知二への手紙 「新潮」一九五七年五月号

俺が俺がは禁物 「東京大学新聞」一九五七年五月  
二十二日

菅生事件の「戸高節」 「中央公論」一九五七年六月  
号

ノーマンさんの憶い出 「世界」一九五七年六月号  
③

現代芸術の精神的基盤 『岩波講座 現代思想』第

十卷「現代芸術の思想」(岩波書店、一九五七年六月刊)

澤登校長の「人間信頼」 「文藝春秋」一九五七年七月号 ②

プリンナーに物もうす 「小説新潮」一九五七年七月号

ある素朴な感想 「読売新聞」一九五七年八月六日

土井晚翠 「現代日本文学全集」第五十八卷『土井

晚翠 薄田泣菫 上田敏 蒲原有明集』(筑摩書房、

一九五七年八月刊) 卷末付録

孤立主義の悲劇・生麦事件 「歴史読本」一九五七

年九月号

奇々怪々菅生事件 「中央公論」一九五七年九月号

読書国日本 「西日本新聞」一九五七年十月十日

『平和と良識』(実業之日本社、一九五七年十月刊)

基地問題の背後にあるもの (一九五六・十二)

九十九里にて (一九五五・六)

ある隷属国の悲劇 (一九五五・五)

日ソ交渉に思う (一九五六・十二)

私の平和論 (一九五二・三) ②

参院選挙について労働組合へ一言 (一九五六・九)

鈴木社会党委員長に問う (一九五六・三)

菅生事件の「戸高節」 (一九五七・六)

奇々怪々菅生事件 (一九五七・九)

もっと光を! (一九五五・七)

もはや「戦後」ではない (一九五六・二) ②

あとがき

匿名懺悔 「文藝春秋」一九五七年十一月号 ③

信頼できる外信を 「新聞労連」一九五七年十一月

十七日

人物スケッチ▽福原麟太郎 「日本読書新聞」一

九五七年十一月十八日

人物スケッチ▽桑原武夫 「日本読書新聞」一九

五七年十一月二十五日

中橋、なぜ死んだ! 「英語青年」第一〇三卷十二

号 一九五七年十二月

告別式に述べた言葉をもつて代える―中橋一夫君をし

のぶ 「OBERON」第二巻第一号 一九五七年

十二月

一九五八(昭和三十三年) 五十五歳

- 「教育」をしない教育が一番よい 「文藝春秋」一九五八年一月号 ③
- 近ごろの若いもの 「太陽」一九五八年一月号
- 嘉村磯多・その書簡から 「新潮」一九五八年一月号 ⑧
- 坂本龍馬 「新潮」一九五八年二月号 ⑧
- シェイクスピアを楽しむ 「図書」一九五八年二月号
- 民の声の審判 「沖繩タイムス」一九五八年二月九日—十三日
- 米ソ文化交流協定 「東京新聞」一九五八年二月十三、十四日
- スリカエの横行 「朝日新聞」一九五八年二月二十四日 ③
- 総理大臣あべこべ発言集 「文藝春秋」一九五八年三月号
- 民の声の審判 「世界」一九五八年三月号
- 恋愛書簡をめぐって 「新潮」一九五八年三月号 ⑥
- 漱石とその門下生 「新潮」一九五八年四月、五月号 ⑧
- ヒトラー関係の一、二の文献について 「思想」一九五八年四月、六月号
- 光るマラヤ映画の社会性 「朝日新聞」一九五八年五月三日
- 恐ろしい公約外のムリ押し 「国際タイムス」一九五八年五月二十六日
- 国旗問題の盲点 「朝日新聞」一九五八年五月二十八日
- 『現代文芸評論集(三)』(『現代日本文学全集』第九十六卷、筑摩書房、一九五八年五月刊)
- ある歴史の教訓 「信濃毎日新聞」一九五八年六月三十日
- △文学のひろば▽ 「文学」一九五八年七月号
- 日中関係の悪化と新聞報道 「世界」一九五八年七月号
- 雑食文化 「朝日新聞」一九五八年七月七日
- 私観・学生スポーツ 「報知新聞」一九五八年七月二十五日
- ナジの処刑をめぐって 「思想」一九五八年八月号
- 傷はまだ癒えていない 「文藝春秋」一九五八年八月号 ③
- 下北半島の旅 「読売新聞」一九五八年七月十七日



ある逆立ちの論理 「週刊読書人」一九五八年七月

二十八日

原爆記念日に思う 「朝日新聞」一九五八年八月六

日 ③

皮相、皮相を笑う 「報知新聞」一九五八年八月十

六日

提督ネルソンの恋 「新潮」一九五八年九月、十月号

勤評の非科学性 「朝日新聞」一九五八年九月五日

「望ましい」にだまされるな 「北海道新聞」一九

五八年九月二十二日

審判の権威 「報知新聞」一九五八年九月二十三日

「君が代」問題の背後 「新潟日報」一九五八年九

月二十三日

アナウンサーのおしゃべり 「報知新聞」一九五八

年十月八日

公共の安全と秩序 「アカハタ」一九五八年十月十

五日

『ぼらのへそ』（彌生書房、一九五八年十月刊）

まえがき チャタレー判決笑話 売れる「不潔な

非芸術」宗谷脱出におもうこと(一) 宗谷脱出

におもうこと(二) 宗谷が帰って来るとき 金銭

について(一) 金銭について(二) 恋愛について

(一) 恋愛について(二) 民主主義は下剋上 先

廻りの思想統制 国を糾弾する 税金のうらおも

て 基地の教訓 赤い那覇市長の波紋 相馬ヶ原

演習場事件 悪魔的人類の末路 戦争に裏づけら

れた平和 奇妙な識者の談話 学者と賞勲 新し

い教育、古い教育(一) 新しい教育、古い教育

(二) 教育の自己侮辱 熱心真剣な先生たち 眼

が輝いていた！ 道徳教育まっぴら御免 思想を

警戒する雇主 便利な新カナヅカイ 当用漢字の

趣旨を守れ 神武以来の好景気？ クリスマスと

無礼講 心のこるひとびと(一) 心のこるひ

とびと(二) カブキ偏痴気論(一) カブキ偏痴気

論(二) ある流離情痴の魂 廃娼運動と流行歌

朝の小ダイが晩には大ダイ プロ・スポーツをほ

める サポータージュ 闘牛のはなし 銭湯と袖珍

版デモクラシー 犬権と人権 権力者とノイロー

ゼ 江戸の尻取り唄 『三国』は願下げ 物は

必要を充す限度で 凡夫礼賛―新井白石のこと

凡夫礼賛―鬼武蔵の遺書 凡夫礼賛―川路聖謨の

こと 北海道の冬 地方小新聞のこと アイヌ美

人の悲劇 敗戦の申し子千歳 美しき銀座の人々  
 マドリッドの思い出 肉体の悪魔 思い出は過去  
 のもの 短期旅行者の早合点 忘れ難い九州の旅  
 太陽族とリアリズム倫理(一) 太陽族とリアリズ  
 ム倫理(二) 歪められた自由 卑俗な好奇心 自  
 由の代価 オリンピックと国家 多すぎる自己没  
 入型 日比親善使節のミス 一本気も反省が必要  
 ことの真相と目撃者 親の責任、子の責任 色紙  
 と浄財 悪魔の辞書 常識のいたずら 「今の若  
 いもの」と「老人」 プロ野球の水準 サルの尻  
 笑い 国際交渉の舞台裏 建国記念日と紀元節  
 政界のウナギ騒動 ヘラルド・トリビュンとラッ  
 キー・ストライク 一つの提言―新聞通信社へ  
 フランスの快男子―大デューマのこと 進学シ  
 ズンに想う 私の健康法 酒のたしなみ 交友あ  
 れこれ 肉親のある肖像画(一) 肉親のある肖像  
 画(二) 肉親のある肖像画(三) 肉親のある肖像  
 画(四) 肉親のある肖像画(五) 虚栄心のとりこ  
 死について 私の遺書(以上、一九五六・十二・一  
 一九五七・三・十七) ③

教育を支配するもの 「世界」一九五八年十一月号

△「松川裁判と広津和郎」に対するアンケート▽大  
 記念碑 「中央公論」緊急増刊・第七十三年第十  
 二号 一九五八年十一月  
 愚民政策を粉砕する最後の道 「朝日新聞」一九五  
 八年十一月三日  
 まえがき 『私のわんぱく物語』(共編、明治図書出  
 版、一九五八年十一月刊)

一九五九(昭和三十四)年 五十六歳

文教政策の影武者たち 「世界」一九五九年一月号  
 お家芸の一票差 「週刊朝日」一九五九年三月一日  
 号

ある奇妙な外交交渉 「世界」一九五九年四月号

③ シュークスピアと二十年 「朝日新聞」一九五九年  
 四月八日

『中野好夫集』(現代知性全集)第十九巻、日本書房、  
 一九五九年四月刊)

図書選定制度にも申す 「週刊読書人」一九五九  
 年六月八日

シンガポールの総選挙をみて 「世界」一九五九年八月号

猪を拾う話 「酒」一九五九年八月号

戦後という時代 「東京新聞」一九五九年八月九、

十一、十二日 ③

奇妙な外交交渉は続く 「世界」一九五九年九月号

③

△安保改定を阻止する途▽ 「週刊読書人」一九五

九年十一月九日

なぜ今割れるのか 「世界」一九五九年十二月号

マッカーサー大使演説への疑問 「中央公論」一九

五九年十二月号

美しい晩年のモーム 「毎日新聞」一九五九年十

二月二十一日

『河盛好蔵 中島健蔵 中野好夫 白井吉見集』(『新

選現代日本文学全集』第三十六巻、筑摩書房、一九

五九年十二月刊)

『問題と視点』(角川書店、一九五九年十二月刊)

まえがき

ある奇妙な外交交渉(一九五九・四) ③

奇妙な外交交渉は続く(一九五九・九) ③

なぜ今割れるのか(一九五九・十二)

勤評の非科学性(一九五八・九・五)

教育を支配するもの(一九五八・十二)

文教政策の影武者たち(一九五九・二)

日中関係の悪化と新聞報道(一九五八・七)

民の声の審判(一九五八・三)

日ソ交渉に思う(一九五六・十二)

私の平和論(一九五二・三) ②

現代政治家の道義感覚(一九五八・三)

権力機構を操るもの(一九五六・十二)

お家芸の一票差(一九五九・三・一)

スリカエの横行(一九五八・二・二十四) ③

雑食文化ということ(一九五八・七・七)

みんなで勉強を(一九五八・十一・三)

戦後という時代(一九五九・八・九、十一、十二) ③

一九六〇(昭和三十五年)年 五十七歳

読史余滴 「歴史読本」一九六〇年三月号

モーム協会誕生のこと 「学燈」一九六〇年三月号

沖縄資料センター発足にあたって 「沖縄タイムス」

一九六〇年一月二十二日

安保新条約への二視点 「朝日新聞」一九六〇年三月六日

近代日本と外国文学 「文学」一九六〇年五月号

③

この報告を読んで 「世界」一九六〇年五月号

米國務省および上院外交委へ 「中央公論」一九六〇年五月号

文化人と政治行動 「東京新聞」一九六〇年五月三十一日—六月二日

変転する新聞論調 「思想」一九六〇年八月号

シェイクスピア翻訳の思い出 「英語青年」第一〇

六卷八号—一九六〇年八月

政治的ムードと言葉 「朝日新聞」一九六〇年九月三、四日

再び福田恆存氏へ 「朝日新聞」一九六〇年九月十四日

四日

ある影との対話 「産経新聞」一九六〇年九月三十日

日

はしがき シェイクスピアとその時代 エリザベ

ス朝劇場と歌舞伎劇場 『総合研究シェイクスピア』

ア(編、英宝社、一九六〇年九月刊)

羊頭狗肉——奇術とわたし 「TAMC会報」第三号—一九七〇年十一月

自衛隊に関する試行的提案 「中央公論」一九六〇年十二月号 ③

自衛隊をみつめる 「朝日新聞」一九六〇年十二月五日

五日

一九六一(昭和三十六)年 五十八歳

日本人の憲法意識 「憲法を生かすもの」(岩波書店、一九六一年三月刊) ③

『文学の常識』(角川書店、一九六一年三月刊—一九五一年、要書房版の再刊)

国会論議に失望する 「世界」一九六一年四月号

『罪負わされた山羊』ユダヤ人 「朝日新聞」一九六一年五月十八日

『銭屋五兵衛』(『日本文化研究』九、新潮社、一九六一年五月刊)

新聞読者論 「新聞研究」一九六一年七月号

憲法第九条が生まれるまで 「世界」一九六一年八月

新聞読者論 「新聞研究」一九六一年七月号

憲法第九条が生まれるまで 「世界」一九六一年八月

新聞読者論 「新聞研究」一九六一年七月号

憲法第九条が生まれるまで 「世界」一九六一年八月

新聞読者論 「新聞研究」一九六一年七月号

新聞読者論 「新聞研究」一九六一年七月号

新聞読者論 「新聞研究」一九六一年七月号

新聞読者論 「新聞研究」一九六一年七月号

月号 ③

裁判と市民常識 「毎日新聞」一九六一年九月十三、十四日

『最後の沖繩県知事』（文藝春秋新社、一九六一年十二月刊）

最後の沖繩県知事（一九五六・三） ⑧

土井晩翠と私（一九五二・十二） ②

澤登校長の「人間信頼」（一九五七・七） ②

大百科を生んだ平凡人

斎藤勇先生の横顔（一九五六・十、一九四八） ②

安井先生のこと（一九四六・四） ②

ある肉親たちの画廊

あるスパルタ教育（一九五七・二）

あとがき

一九六二（昭和三十七）年 五十九歳

『人間うらおもて』（新潮社、一九六二年一月刊）

まえがき

銭屋五兵衛（一九六一・五）

嘉村磯多・その書簡から（一九五八・一） ⑧

坂本龍馬・その書簡など（一九五八・二） ⑧

漱石とその門下生（一九五八・四、五） ⑧

提督ネルソンの恋（一九五八・九、十）

ポーの恋愛書簡をめぐって（一九五八・三） ⑥

あとがき

アメリカで講義した日本文学 「朝日新聞」一九六二年九月五、六日

文部省のあり方 「毎日新聞」一九六二年十月十二、十五日

日本からみたキューバ問題 「エコノミスト」一九六二年十一月十三日号

アメリカに暮らして

「産経新聞」一九六二年十一月十四日 ③

「一日一史」（編、筑摩書房、一九六二年十一月刊）

「現実的」ということ 「中央公論」一九六二年十二月号

日本に帰って感あり

「朝日新聞」一九六二年十二月四、五日

「現代教科書批判」 「朝日新聞」一九六二年十二月十四日

「朝日新聞」一九六二年十二月十四日

「朝日新聞」一九六二年十二月十四日

「朝日新聞」一九六二年十二月十四日

「朝日新聞」一九六二年十二月十四日

「朝日新聞」一九六二年十二月十四日

「朝日新聞」一九六二年十二月十四日

一九六四年六月（毎月末）

一九六三（昭和三十八）年 六十歳

私の自動車社会学 「学鑑」一九六三年一月号

△スポーツと私▽ 「報知新聞」一九六三年二月四

一六日

教研集会に誇りを 「教育評論」一九六三年三月号

△私の好きな主人公▽ 「愛媛新聞」一九六三年三

月十五日、「高知新聞」三月十五日

裁判と推測 「世界」一九六三年四月号

日本―新しい極西 「中部日本新聞」一九六三年五

月十日、「西日本新聞」五月十五日、「北海道新聞」

五月十六日

『東西文芸論集』（編、「世界教養全集」別巻二、平凡

社、一九六三年七月刊）

日本人のなかの沖繩 「世界」一九六三年八月号

④

ロレンス出生の秘密 「学鑑」一九六三年八月号

ある憤りと疑問 「月刊社会党」一九六三年八月号

「新しい日本」を読んで 「毎日新聞」一九六三年

九月三日

雑感 「学鑑」一九六三年十月号

大学総長論 「エコノミスト」一九六三年十二月十

七日号

『アラビアのロレンス』（岩波書店、一九六三年十二月

刊）一九四〇年版の改版） ⑦

まえがき

青年考古学者

沙漠の叛乱

沙漠の叙事詩

闘争と孤独

この人を見よ ECCE HOMO

正しい認識のために、沖繩資料センターに協力を

「沖繩タイムス」一九六三年十二月三十一日

一九六四（昭和三十九）年 六十一歳

シェイクスピアの面白さ 「学鑑」一九六四年一月

号―一九六五年十二月号 ⑤

沖繩の祖国復帰 「琉球新報」一九六四年一月一日

羽仁五郎さんにかがう 「思想」一九六四年二月

号 ③

美しい老齡 「東京新聞」一九六四年二月八、九日

③

指導資料を読んで 「朝日新聞」一九六四年二月十

四、十五日

「教委法改正」に一言 「読売新聞」一九六四年二月

二十二日

会談の打ち切りを 「世界」一九六四年四月号

人間の死にかた 「新潮」一九六四年四月号 ⑧

△私の旅情▽ミッションの遺跡・カール 「毎日

新聞」一九六四年四月十九日(日曜特集)

トルストイの最後の日々 「新潮」一九六四年五月

号 ⑧

非文学的な感想ひとつ 「風景」一九六四年六月号

ある懐疑主義者の回心 「新潮」一九六四年六月号

⑧

『エリザベス朝演劇講話』(八潮出版社、一九六四年六

月刊)一九四七年、新月社版の再刊)

いわゆる「押しつけ」にいたるまで 「世界」一九

六四年七月号 ③

「ガリヴァー」の作者の死 「新潮」一九六四年八月

号 ⑧

時効になった下山事件と松川事件 「週刊読書人」

一九六四年八月十七日号

夏日随想 「新潮」一九六四年九月号 ⑧

中山義秀 「群像」一九六四年十月号 ⑧

「自主的」という看板と真実 「潮」一九六四年十月

号 ③

フロイトと死の衝動 「新潮」一九六四年十一月号

⑧

旧制高校的なるもの 「展望」一九六四年十二月号

③

一九六五(昭和四十)年 六十二歳

パトリリッジ事件とスウィフト 「図書」一九六五

年一、二月号 ⑥

戦後二十年の最大の弱点 「毎日新聞」一九六五年

一月九日 ③

文筆家チャール 「朝日新聞」一九六五年一月二

十五日

親鸞、その晩年と死 「新潮」一九六五年二月号

⑧

世界文学全集に三つの提言 「産経新聞」一九六五年二月二十八日

幸田露伴 「現代文学大系」第三卷『幸田露伴 樋口一葉集』（筑摩書房、一九六五年三月刊）解説

⑧

呆れ返った話 「日本」一九六五年四月号

佐賀の乱と江藤新平 「新潮」一九六五年四月号

⑧

根本的再検討の機会 「中央公論」一九六五年四月号

号

△アンケート「いま何をなすべきか」▽ 「世界」臨時増刊Ⅱ一九六五年四月

如是我観 「雲」第六号Ⅱ一九六五年四月 ⑤

川路聖謨 「読売新聞」一九六五年四月二一九日

⑧

日本国憲法の成立 憲法問題研究会編『憲法読本』上（岩波書店、一九六五年四月刊）

プーシキンとその妻 「新潮」一九六五年六月号

⑧

『沖繩問題二十年』（新崎盛暉と共著、岩波書店、一九六五年六月刊）

六五年六月刊

兵隊の立場から 「自由」一九六五年七月号

桑原武夫 「文藝春秋」一九六五年七月号

都議選をふり返って 「朝日新聞」一九六五年七月二十六日

二十六日

△今月の論調▽ 「毎日新聞」一九六五年六月—十月（毎月末）

『私の憲法勉強』（講談社、一九六五年九月刊） ③

まえがき

1 わたしの憲法勉強（一九六五・九）

2 いわゆる「押しつけ」にいたるまで（一九六四・七）

四・七）

3 憲法第九条が生まれるまで（一九六一・八）

4 「自主的」という看板と真実（一九六四・十）

5 改憲論の根底にあるもの（一九六五・九）

6 日本人の憲法意識（一九六一・三）

あとがき

見せかけだけの渡航緩和 「琉球新報」一九六五年十月十五日

十月十五日

ガン・センター入院始末 「展望」一九六五年十一月

号



「浅間小浅間」望見 「春日」第十二号（春日会発行） 一 一九六五年十二月

一 一九六六（昭和四十二）年 六十三歳

講和条約と安保条約 「思想の科学」一九六六年一月号

教科書問題暴論 「潮」一九六六年一月号

ヤフーのしゃれこうべ 「図書」一九六六年二月十四号 ⑥

資料を集めて六年 「世界」一九六六年三月号

モームのことも 「英語研究」一九六六年三月号

ハセールスマンの死と私 「民芸の仲間」八五号

一 一九六六年三月

英語辞書のはなし 『辞典のはなし』（角川書店、

一 一九六六年三月刊）

尾上栄三郎のこと 「悲劇喜劇」一九六六年四月号

⑧

モームの美術観 「英語青年」第一二卷四号 一

九六六年四月

白隠「夜船閑話」 「エコノミスト」一九六六年四月

十二日号 ③

白鳥と荷風 『正宗白鳥全集』第五卷（新潮社、一九六六年四月刊）附録

ソマーセットとモーム家のすべて 「学燈」一九六六年五月号

帳じりは黒字だった 「毎日新聞」一九六六年六月十四日

朱牟田君、おめでとう 「世界文学大系」第七十六

卷『リチャードソン スタイン』（筑摩書房、一九六六年六月刊）月報

人と生涯 「20世紀英米文学案内」3 『コンラッド』

（編著、研究社出版、一九六六年六月刊）

沖繩を忘れないために—日本人の責任 「沖繩タイムス」一九六六年七月十四日

沖繩を忘れないために 「教育評論」一九六六年九月号

諷刺文学雑考—断片 「文学」一九六六年十二月号

スウィフトの遺言書、その他 「図書」一九六六年

十二月号、一九六七年二月号 ⑥

一九六七（昭和四十二）年 六十四歳

歴史は過去の旧事か 「歴史読本」一九六七年一月号

現実論のなかの現実論 「別冊潮」一九六七年新年号

佐藤路線を葬ろう 「世界」一九六七年二月号

△文化大革命についての私の感想▽中国国民の幸福を

析る 「中央公論」一九六七年三月増刊号

会見記・ころあたたまる老作家△ホーム▽ 「文

藝春秋」一九六七年五月号

「都政を革新する」ことの意味 「世界」一九六七年

五月号

『シェイクスピアの面白さ』（新潮社、一九六七年五月

刊）⑤

シェイクスピアの面白さ（一九六四・一―一九六五・

十二）

あとがき

革新都政を支えるものは何か 「月刊社会党」一九

六七年六月号

偶感ひとつ 「マスコミ市民」一九六七年六月号

エリザベス朝劇場と歌舞伎劇場 「学燈」一九六七年六月―十月号 ⑤

市民運動のあり方―考 「世界」一九六七年七月号

③

池田弥三郎著「わが師、わが学」 「藝能」一九六

七年七月号

まずもっと沖繩を知れ 「世界」一九六七年八月号

二つの日記 「風景」一九六七年八月号 ③

わたしはこう思う 「都政」一九六七年九月号

スウィフト、母を恋うるの記 「図書」一九六七年

九、十月号 ⑥

社会党再建は絶望か 「文藝春秋」一九六七年十月

号

ものを言う鍛錬 「悲劇喜劇」一九六七年十月号

沖繩と憲法 「法学セミナー」一九六七年十、十一

月号

わたしはかく考える 「潮」一九六七年十一月号

わたしの見たい芝居 「悲劇喜劇」一九六七年十一

月号

歌舞伎は保存芸術か？ 「悲劇喜劇」一九六七年十

二月号

佐藤・ジョンソン会談を前に 「世界」一九六七年  
十二月号

一九六八(昭和四十三)年 六十五歳

沖繩を考える 「文化評論」一九六八年一月号

沖繩報道に注文する 「新聞研究」一九六八年一月  
号

まず「沖繩」を知る運動を 「教育評論」一九六八  
年三月号

ガリヴァーが生まれるまで 「図書」一九六八年三  
—五月号 ⑥

最近の国防論議に思う 「別冊潮」一九六八年四月  
号 ③

『中島健蔵 桑原武夫 中野好夫 竹山道雄 高橋義  
孝 竹内好集』(『日本現代文学全集』第九十三卷、  
講談社、一九六八年四月刊)

沖繩と日本の安全保障 「ジュリスト」一九六八年  
五月号

四たび沖繩渡航ならず 「沖繩タイムス」一九六八

年五月三日

都民のひとりとして 「月刊社会党」一九六八年七  
月号

沖繩はなぜわたしたちの問題であらねばならないか

沖繩返還を実現するために 編者あとがき 『沖  
繩問題を考える』(編著、太平出版社、一九六八年  
七月刊)

安全保障問題と沖繩 「世界」一九六八年八月号

「瘠我慢の説」に寄せて 「文学界」一九六八年八月  
号 ③

スウィフトと「ドレイピア書簡」 「図書」一九六八  
年八月—十一月号 ⑥

初の沖繩訪問を前に 「琉球新報」一九六八年八月  
五日

『基地沖繩』を読んで 「琉球新報」一九六八年八月  
十日

マーク・トウェインの戦争批判 「展望」一九六八年  
九月号 ③

蘆花徳富健次郎(第一部) 「展望」一九六八年十  
月号—一九七〇年三月号 ④

蘆花探訪拾遺(一) 楫子の告白について 「文学」

- 一九六八年十月号 ⑨  
 沖繩と私 「世界」一九六八年十月号 ④  
 英文学夜ばなし 「学鑑」一九六八年十月号―一九  
 七一年四月号 ⑥  
 テレビというもの 「Iwanami Hall」第六号―  
 一九六八年十月  
 スウィフトと女性呪詛 「学鑑」一九六八年十一、  
 十二月号  
 蘆花探訪拾遺(二) 熊本洋学校と蘆花 「文学」一  
 九六八年十一月号 ⑨  
 「沖繩返還」私達の義務と責任において 「自治と  
 反戦」第八号(学生自治会・大正大学新聞委員会発  
 行) 一九六八年十一月一日  
 言わでものこと 「東京新聞」一九六八年十一月二  
 十二日 ③  
 南方同胞援護会編『沖繩問題基本資料集』(沖繩資料  
 センターとして資料編集、南方同胞援護会、一九六  
 八年十一月刊)  
 序文「沖繩百万同胞の苦悩の歴史を知るために」  
 東京沖繩県学生会編『祖国なき沖繩』(太平出版社、  
 一九六八年十一月刊) 一九五四年、日社版の再刊)
- 蘆花探訪拾遺(三) 蘆花の生年月日(二) 「文学」  
 一九六八年十二月号 ⑨  
 一九六九(昭和四十四)年 六十六歳  
 浪漫主義と古典主義 「学鑑」一九六九年一―三月号  
 ⑥  
 蘆花探訪拾遺(四) 蘆花の生年月日(二) 「文学」  
 一九六九年一月号 ⑨  
 アジアの平和と沖繩の返還 「朝日ジャーナル」一  
 九六九年一月十二日号  
 川路聖謨・遺書のことなど 「図書」一九六九年二  
 月号 ④  
 蘆花探訪拾遺(五) 富と富、雅号「蘆花」について  
 「文学」一九六九年二月号 ⑨  
 蘆花探訪拾遺(六) 「黒い眼と茶色の目」のモデル  
 「文学」一九六九年三月号 ⑪  
 伊賀町の異人さん 『定本モラエス全集』第一巻(集  
 英社、一九六九年三月刊) 月報  
 翻訳雑話 「学鑑」一九六九年四―六月号 ⑥  
 マゼラン 『世界歴史シリーズ第14巻 大探検時代』

(世界文化社、一九六九年四月刊)

Reductio ad absurdum 「図書」一九六九年五、

六月号 ⑥

沖繩で感じたこと三、四 「世界」一九六九年六月号

『スウィフト考』(岩波書店、一九六九年六月刊) ⑥

序章にもなるまえがき(一九六九・六)

スウィフト、母を恋うるの記(一九六七・九、十)

パートリッジ事件とスウィフト(一九六五・一、

二)

スウィフトと「ドレイピア書簡」(一九六八・八一

十二)

ガリヴァーが生まれるまで(一九六八・三一五)

スウィフトと女性呪詛(一九六八・十一、十二)

スウィフトの遺言書、その他(一九六六・十二、一

九六七・二)

ヤフーのしゃれこうべ(一九六六・二一四)

「奴婢奉公訓」抄(一九六九・六)

Reductio ad absurdum (一九六九・五、六)

あとがき

『人間の死にかた』(新潮社、一九六九年六月刊) ⑧

まえがき(一九六四・四)

トルストイの最後の日々(一九六四・五)

ある懷疑主義者の回心(一九六四・六)

「ガリヴァー」の作者の死(一九六四・八)

夏日随想(一九六四・九)

フロイトと死の衝動(一九六四・十二)

親鸞、その晩年と死(一九六五・二)

佐賀の乱と江藤新平(一九六五・四)

プーシキンとその妻(一九六五・六)

あとがき

影響と暗合 「学燈」一九六九年七、八月号 ⑥

アポロとコロンブス 「朝日新聞」一九六九年七月

二十一日 ④

読書遍歴から 「学燈」一九六九年十、十一月号、

一九七〇年一、二月号 ⑥

真の沖繩解放図れ 「朝日新聞」一九六九年十一月

十一日

新しい闘いのはじまり 「世界」一九六九年十二月

号

逆臣は歴史によみがえる 「潮」一九六九年十二月

号 ④

日米共同声明に関する内外解釈の重大な食い違い  
について(小冊子、自費発行)

日米共同声明の解釈 「琉球新報」一九六九年十二月  
月二十一日

『戦後資料沖繩』(編、日本評論社、一九六九年十二月  
刊)

一九七〇(昭和四十五)年 六十七歳

秋山真之参謀の手記 「文学界」一九七〇年一月号

④ 日米共同声明に関する内外解釈の重大な食い違いに  
ついて 「マスコミ市民」一九七〇年二月号

言わでものこと、書かでものこと 「風景」一九七  
〇年二月号 ④

ラッセル卿の個人的回想 「毎日新聞」一九七〇年  
二月四日

『現代の映像』——「抗命」について質問 「マスコミ  
市民」一九七〇年三月号

念のために一言 「英語青年」第一一六卷三号——  
一九七〇年三月

日米共同声明と「沖繩返還」 「世界」一九七〇年三、  
四月号 ④

読む、書く、しゃべるということ 「学燈」一九七  
〇年三、四月号 ⑥

独歩と花袋のこと 「現代日本文学大系」第十一卷  
『国木田独歩 田山花袋集』(筑摩書房、一九七〇年  
三月刊) 月報

蘆花徳富健次郎(第二部) 「展望」一九七〇年四月  
号——一九七二年七月号 ⑩

想像力のトリック 「学燈」一九七〇年五、六月号  
⑥

「造反・紛争」以前 「朝日ジャーナル」一九七〇年  
五月十日号 ④

『人間・歴史・運命』(新人物往来社、一九七〇年六月  
刊)——一九五四年、新潮社版『世界史の十二の出来事』  
の再刊)

異文化接触と国語の問題 「学燈」一九七〇年七、  
八月号 ⑥

「重要事項方式」の季節に思う 「毎日新聞」一九七  
〇年八月十二日

『沖繩・70年前後』(新崎盛暉と共著、岩波書店、一九

七〇年八月刊)

Pot-pourri 「学鑑」一九七〇年九、十月号 ⑥

欺瞞の三百議席 「世界」一九七〇年十月号

瞬時の夢 「波」一九七〇年十一・十二月合併号

④

文学と老人 「学鑑」一九七〇年十一、十二月号

⑥

沖縄選挙の結果を聞いて 「沖縄タイムス」一九七〇年十一月十七日

○年十一月十七日

渡辺さんのこと 『渡辺一夫著作集』第十二卷(筑

摩書房、一九七〇年十二月刊)付録

一九七二(昭和四十六)年 六十八歳

言わでものこと 「月刊社会党」一九七二年二月号

『高ころび』の日本? 「世界」一九七二年三月号

イギリス文学とアナーキズム 「学鑑」一九七二年

三、四月号

だから私は支持する―都知事選 「毎日新聞」一九

七一年四月一日

吹けよ川風 『奥野信太郎回想集』(三田文学ライブ

ラリ、一九七二年六月刊) ⑧

返還協定とその周辺 「沖縄タイムス」一九七二年

七月三日

沖縄返還協定とその周辺 「世界」一九七二年八月

号

△編集者への手紙▽ちょっと一言 「世界」一九七

一年八月号

沖縄資料センターのこと 「図書」一九七一年九、

十月号 ④

義秀さんのことども 『中山義秀全集』第二卷(新

潮社、一九七二年九月刊)付録

軍国主義の復活に警告する 「マスコミ市民」一九

七一年十月号

「思出の記」をめぐってのある挿話 「現代日本文学

大系」第九卷『徳富蘆花 木下尚江集』(筑摩書房、

一九七一年十月刊)月報

多少の主張もある雑感 「世界」一九七一年十一月

号

蘆花探訪拾遺(七) 蘆花と死刑囚 「文学」一九七

一年十二月号 ⑩

最悪の沖縄返還演出 「毎日新聞」一九七一年十二

月七日

『英文学夜ばなし』（新潮社、一九七一年十二月刊）

⑥

はじめに（一九六八・十）

読書遍歴から（一九六九・十、十一、一九七〇・一、

二）

浪漫主義と古典主義（一九六九・一一三）

影響と暗合（一九六九・七、八）

翻訳雑話（一九六九・四一六）

読む、書く、しゃべるといふこと（一九七〇・三、

四）

想像力のトリック（一九七〇・五、六）

異文化接触と国語の問題（一九七〇・七、八）

イギリス文学とアナーキズム（一九七二・三、四）

Port-pourri（一九七〇・九、十）

文学と老人（一九七〇・十一、十二）

あとがき

一九七二（昭和四十七）年 六十九歳

蘆花探訪拾遺（八） 蘆花と死刑囚（つづき） 「文学」

一九七二年一月号 ⑩

尻とり唄の話 「うえの」一九七二年一月号 ④

水上勉著『宇野浩二伝』 「波」一九七二年一・二月

合併号

蘆花探訪拾遺（九） 蘆花宛トルストイ書簡について

「文学」一九七二年二月号 ⑩

天皇の訪沖——慎重を要すること 「毎日新聞」一

九七二年二月三日

シェイクスピア今昔 「朝日新聞」一九七二年二月

十九日 ④

蘆花探訪拾遺（十） 乃木將軍と蘆花 「文学」一九

七二年三月号 ⑩

『沖繩と私』（時事通信社、一九七二年三月刊）

沖繩の果たして何が返るのか（一九七二・四） ④

多少の主張もある雑感（一九七二・十一）

沖繩返還協定とその周辺（一九七二・八）

日米共同声明と「沖繩返還」（一九七〇・三、四）

④

沖繩返還を実現するために（一九六八・七）

佐藤・ジョンソン会談を前に（一九六七・十二）

わたしはかく考える（一九六七・十一）



沖繩で感じたこと三、四（一九六九・六）

沖繩と私（一九六八・十）④

沖繩と憲法（一九六七・十、十二）

民の声の審判（一九五八・三）

沖繩資料センターのこと（一九七一・九、十）④

最後の沖繩県知事（一九五六・三）⑧

あとがき

『蘆花徳富健次郎 第一部』（筑摩書房、一九七二年三月刊）⑨

序 この人を見よエツケ・ホモ

一 生立ちと背景

二 少年健次郎

三 官許同志社英学校

四 賢兄愚弟

五 同志社再入学

六 茶色の目

七 嗟呼、国民之友生れたり

八 編集局の片隅で

九 結婚

十 得意と失意

十一 逗子柳屋

十二 不如帰

附録 蘆花探訪拾遺

1 矢島楯子の告白について

2 蘆花の生年月日

3 富と富

4 熊本洋学校と蘆花

5 雅号「蘆花」について

6 「みだれあし」考

資料 みだれあし

あとがき

沖繩の果たして何が返るのか 「世界」一九七二年

四月号④

五月十五日以後 「自由と正義」一九七二年四月号

尻とり唄の話・補遺 「うえの」一九七二年四月号

④

ミソとクソとを一緒にするな 「マスコミ市民」一

九七二年五月号

五月十五日以後 「朝日新聞」一九七二年五月十一

日

△太平楽▽ 「日本経済新聞」一九七二年五月二十

七日

「極秘文書漏洩事件」とその後 「マスコミ市民」一  
九七二年六月号

沖繩を見つめて 「法学セミナー」一九七二年六月  
号

遅すぎるといふこと 「中央公論」一九七二年六月  
号

蘆花徳富健次郎(第三部) 「展望」一九七二年八月  
号—一九七四年五月号 ⑩

蘆花探訪拾遺(十一)「寄生木」草稿考 「文学」一  
九七二年八月号 ⑩

「戦争まで」 『中村光夫全集』第十二卷(筑摩書房、  
一九七二年八月刊)月報

漫談・桂太郎と佐藤栄作 「中央公論」一九七二年  
九月号

『中島健蔵 河盛好蔵 中野好夫 桑原武夫集』(『現  
代日本文学大系』第七十四卷、筑摩書房、一九七二  
年九月刊)

『蘆花徳富健次郎 第二部』(筑摩書房、一九七二年九  
月刊) ⑩

一 ふたたび上京

二 「自然と人生」

三 「思出の記」

四 「黒潮」前後

五 独立宣言と黒潮社

六 社会主義

七 日露役と蘆花

八 ふたたび混迷の底へ

九 暖潮解氷

十 順礼紀行

十一 千歳村粕谷へ

十二 「寄生木」

十三 美的百姓

附録 蘆花探訪拾遺

1 蘆花と死刑囚 I

2 蘆花と死刑囚 II

3 蘆花宛トルストイ書簡について

4 蘆花外遊費用をめぐる疑惑について

5 「寄生木」草稿考

6 乃木將軍と蘆花

あとがき

正直か、正直か? 「文学」一九七二年十月号

誰のために書いているのか 「学燈」一九七二年十

二月号 ④

蘆花探訪拾遺(十二) 難波大助事件と蘆花 「文学」

一九七二年十二月号

一九七三(昭和四十八)年 七十歳

いささか跡始末のこと 「文学」一九七三年一月号

思い出すことども 「学燈」一九七三年三月号

蘆花探訪拾遺(十三) 蘆花と真山青果 「文学」一

九七三年三月号

橋寺太郎 「波」一九七三年四月号 ⑧

私のハムレット観 「悲劇喜劇」一九七三年四月号

阿部知二氏を悼む 「朝日新聞」一九七三年四月二

十五日

漫談・前島熊さんのキツネ哲学 「中央公論」一九

七三年六月号 ④

蘆花探訪拾遺(十四) 伊予今治と蘆花 「文学」一

九七三年七月号

阿部君へのわかれ 「文芸」一九七三年七月号

『忘れえぬ日本人』(筑摩書房、一九七三年七月刊)

蒼龍窟河井継之助(一九五三・三) ⑦

川路聖謨(一九六五・四・二一九) ⑧

聖謨・遺書のことなど(一九六九・二) ④

坂本龍馬(一九五八・二) ⑧

嘉村儀多(一九五八・二) ⑧

漱石とその門下生(一九五八・四、五) ⑧

凡夫礼讃

新井白石のこと(一九五七) ③

鬼武蔵の遺書(一九五七)

殿木春次郎のこと(一九五七)

最後の沖繩県知事——島田勲(一九五六・三) ⑧

大百科を生んだ平凡人——下中彌三郎

澤登校長の「人間信頼」(一九五七・七) ②

安井哲子先生のこと(一九四六・四) ②

斎藤勇先生の横顔(一九五六・十、一九四八) ②

あるスパルタ教育——徳島中学の恩師たち(一九

五七・二)

土井晩翠と私(一九五二・十二) ②

ある肉親たちの画廊(一九七三・七) ⑧

あとがき

阿部知二・人とその仕事と 「世界」一九七三年八

月号 ⑧

△日記▽ 「風景」一九七三年九月号

最少限の感想——△金大中氏事件を考える▽ 「世

界」一九七三年十月号

わたしの文章心得 「学燈」一九七三年十二月号

④

一九七四（昭和四十九）年 七十一歳

落葉を焚きながらの感想 「文藝春秋」一九七四年

一月号 ④

モームの生誕百年 「サンケイ新聞」一九七四年一

月十九日

ブランデン先生のことども 「読売新聞」一九七四

年一月二十四日 ④

このごろ思うこと 「東京新聞」一九七四年一月三

十日

「震は亨る」のこと 「文学」一九七四年二月号

徳富蘆花という人 「ちくま」一九七四年二、三月

号

ひどく古ぼけた話 「群像」一九七四年三月号 ④

実践力に富む政治学徒の人間記録 「朝日ジャーナ

ル」一九七四年三月二十九日号 ④

『沖繩のあしおと』を読んで 「世界」一九七四年四

月号

高風の財界人——伊庭貞剛 「マネジメント」一九

七四年四月号 ④

畏友吉川君のことなど 『吉川幸次郎全集』第八卷

（筑摩書房、一九七四年四月刊）月報

雑感・教育のこと 「教育月報」一九七四年五月号

④

リヴァサイド・シェイクスピアのこと 「学燈」一九

七四年五月号

妄言当死 「読売新聞」一九七四年八月十八日 ④

『蘆花徳富健次郎 第三部』（筑摩書房、一九七四年九

月刊）⑪

一 「謀叛論」

二 颱風の眼——「みづのたはこと」まで

三 颱風ふたたび

四 死の蔭の旅

五 父の死、徳富家の埋葬

六 あるカタルシス

七 閉居三年

八 「新春」をめぐって

九 蘆花とキリスト教

十 世界をめぐって

十一 心の母に

十二 黄昏近く

十三 「富士」という名の遺書

十四 死とその前後

むすび

附録 蘆花探訪拾遺

1 果して蘆花は狂人か？

2 小説「黒い眼と茶色の目」のモデル

3 小説「富士」のモデル

あとがき

年譜

索引

『歴史の中の肖像画』（筑摩書房、一九七四年十月刊）

トマス・ペイン——最初の世界市民（一九四九・十

二）⑦

コロンブス——海に憑かれた男（一九五〇・六）

チェンチ家の人々——ローマ殺人事件（一九五一・

九）⑦

ピアス——文明嫌悪時代の文士（一九五六・八）

⑥

ポチョムキン——神と女帝を弄んだ男（一九五七・

二）

ネルソン——提督の恋（一九五八・九、十）

ポー——恋愛書簡をめぐって（一九五八・三）⑥

ヒトラー——悪魔の人間学（一九五八・四、六）

あとがき

何をいったらいいのか 『回想の古田晁』（筑摩書房、

一九七四年十月刊）

ある少年向伝記叢書のこと 「学鏡」一九七四年十

二月号④

人間蘆花について 「熊本日日新聞」一九七四年十

二月三十一日

一九七五（昭和五十）年 七十二歳

人は獣に及ばず 「朝日新聞」一九七五年一月三日

④

ある石油基地をめぐって 「世界」一九七五年二、

三月号

逸題 「風景」一九七五年三月号

くたばれ、SLファン! 「潮」一九七五年三月号

④

紙魚独言 「うえの」一九七五年三月号

言葉について 「文芸展望」第九号 一九七五年四

月

真実の報道とジャーナリストを守るために 「マス

コミ市民」一九七五年六月号

司馬江漢 「図書」一九七五年七月号

渡辺一夫さんのことども 「ちくま」一九七五年七

月号 ⑧

解説 『阿部知二全集』第十三卷(河出書房新社、

一九七五年七月刊)

思い出すままに 「学燈」一九七五年八月号 ⑧

日記、書簡、回想録等々について 「文学」一九七

五年九月号

解説 『斎藤勇著作集』第三卷「シェイクスピア」

(編、研究社、一九七五年九月刊)

徳富蘇峰と『国民之友』 「中央公論」一九七五年十

一月号

言葉のあや 「朝日新聞」一九七五年十一月十一日

歳末、感なきにしもあらず 「読売新聞」一九七五

年十二月二十七日

一九七六(昭和五十二)年 七十三歳

素人の直感 「東京新聞」一九七六年一月五日 ④

野谷氏「漱石、シェイクスピアの神話」にひと言

「毎日新聞」一九七六年一月十三日

青果と蘆花と 『真山青果全集』(講談社、一九七六

年一、三月刊)月報 ④

ロッキード問題とマスコミ、その他 「マスコミ市

民」一九七六年二月号

練習、教本ナシでおぼえたゴルフ 「週刊現代」一

九七六年二月十九日号

角川源義君のことども 「俳句」一九七六年三月号

私にとつての昭和五十年 「週刊読売」一九七六年

三月十日号 ④

小国主義の系譜 「潮」一九七六年三、五月号 ④

差別を「商う」もの 「展望」一九七六年五月号

ロッキード問題雑感 「世界」一九七六年五月号

死について 「サンデー毎日」一九七六年五月十六

日号一六月六日号 ④

まず言葉から 「朝日新聞」一九七六年五月二十四

日

△書評▽新崎盛暉著『戦後沖繩史』 「社会新報」一

九七六年六月二日号

曲言する 「新潮」一九七六年七月号

解説 徳富健次郎著『謀叛論』(編、岩波書店、一

九七六年七月刊)

忘れられたある平和主義者 「潮」一九七六年九月

号 ④

『沖繩戦後史』(新崎盛暉と共著、岩波書店、一九七六

年十月刊)

ギボンの『ローマ帝国衰亡史』 「ちくま」一九七六

年十一月号

『文学・人間・社会』(文藝春秋、一九七六年十一月刊)

紙魚の棲み家から 「学燈」一九七六年十二月号、

一九七七年四月号

陸別町での一日 「東京新聞」一九七六年十二月八

日

元号をめぐる 「読売新聞」一九七六年十二月十

一日

『風前雨後』(毎日新聞社、一九七六年十二月刊)

山本有三先生を偲ぶ 『山本有三全集』第三卷(新

潮社、一九七六年十二月刊)付録

一九七七(昭和五十二年) 七十四歳

英語教育寸感 「潮」一九七七年一月号

史書読み、そのほか 「みすず」一九七七年一月号

④

法の世界、法律家の頭 「展望」一九七七年一月号

蘆花「十年」中斷事件について 「文学」一九七七

年一、二、四月号

政治屋の握手、そして笑顔 「東京新聞」一九七七

年一月十日

△論壇時評▽ 「朝日新聞」一九七七年一月一十二

月(毎月末)

シェイクスピア、コンメディア・デッラルテ、そして

ジャック・カロ 「展望」一九七七年二月号 ④

割切犀利な分析 『土居光知著作集』内容見本(岩

波書店、一九七七年二月)

NHKの新企画―言説記録の公刊について 「マス

コミ市民」一九七七年三月号

ある出島蘭館銅牌拓本の話 「図書」一九七七年四月号 ④

ノーマンさんのことども 「思想」一九七七年四月号

浮世ばなれたある教育談 「中央公論」一九七七年五月号 ④

NHKの新しい企画 「世界」一九七七年五月号  
私は怒る 「部落解放」一九七七年六月号

二十周年と社会党の原点 「月刊社会党」一九七七年七月号

テレビの言葉は空に消える 「暮しの手帖」一九七七年七月、八月号 ④

外国の教科書に驚く 「朝日新聞」一九七七年八月二十七日 ④

明治新聞雑誌文庫とわたし 「朝日新聞」一九七七年十月十九日 ④

比嘉春潮氏との別れ 「沖縄タイムス」一九七七年十一月九日

一九七八（昭和五十三）年 七十五歳

『マスコミ市民』この十年 「マスコミ市民」一九七八年一月号

ヴィヴァ・エツコクン！ 「友」第一〇九号 一九七八年二月

『世界史の十二の出来事』（文春文庫、文藝春秋、一九七八年三月刊 一九五四年、新潮社版の再刊）「裏切られた革命」に代えて、次のものが収録されている。

最初の世界市民（一九四九・十二）⑦

成田開港を前にして―私見 「世界」一九七八年六月号 ④

「ローマ帝国衰亡史」翻訳余談 「ちくま」一九七八年六月号 ④

落葉のくりごと 「あるとき」一九七八年七月号 ⑧

△よしのずいから▽ 「毎日新聞」一九七八年七月二十四日、八月三十日、十月二日、十一月九日、十二月二十六日



記者今昔、そのほか 「世界」一九七八年九月号

④

三斗小屋合戦の跡を往く 「歴史読本」一九七八年

十月号 ⑧

宮武外骨翁のこと 「宮武外骨解剖」第五号 一九

七八年十一月 ④

有事立法ということについて 「暮しの手帖」一九

七八年十二月号

県知事選の結果に思う 「沖繩タイムス」一九七九

年十二月十九日

一九七九(昭和五十四)年 七十六歳

奇襲攻撃ということ 「軍事民論」一九七九年一月

号

沖繩弧の自治権 「琉球新報」一九七九年一月一日

④

イワンの馬鹿 「沖繩タイムス」一九七九年一月四

日 ④

悼惜 『回想の厨川文夫』(三田文学ライブラリー、

一九七九年一月刊)

△よしのずいから▽ 「毎日新聞」一九七九年二月

七日、五月四日、六月四日、七月六日、八月四日、

九月五日、十一月六日、十二月五日

「制裁」と「奇襲」と 「潮」一九七九年四月号

司馬江漢雑話 「図書」一九七九年四月号

四十年のつきあい 「悲劇喜劇」一九七九年五月号

莊子見之、棄其魚 「財界展望」一九七九年六

月号

人間司馬江漢のこと 「朝日新聞」一九七九年六月

十五日

楽しい期待 「マスコミ市民」一九七九年七月号

漢字名の訓み 「文藝春秋」一九七九年七月号 ④

島津軍の敗走路を往く 「歴史読本」一九七九年七

月号 ⑧

『酸っぱい葡萄』(みすず書房、一九七九年九月刊)

まことに朗報 『木下李太郎日記』内容見本(岩波

書店、一九七九年十月)

一九八〇(昭和五十五年)年 七十七歳

ローマ史雑感 「波」一九八〇年一月号

- 滅ぶを知ること 「朝日新聞」一九八〇年一月一日  
 △しおり▽ 「読売新聞」一九八〇年一月七日、十  
 四日、二十一日、二十八日  
 △よしのずいから▽ 「毎日新聞」一九八〇年一月  
 十八日、二月十六日、三月十四日、四月九日、五月  
 十六日、六月十八日  
 小国主義の系譜 「新沖縄文学」第四十四号 一九  
 八〇年三月  
 △随想三題▽ 「商工新聞」一九八〇年三月三日、  
 十七日、三十一日  
 おけらのたわごと 「那須」第六十号（那須ゴルフ  
 倶楽部発行） 一九八〇年四月  
 新田次郎氏の思い出 「歴史読本」一九八〇年五月  
 号  
 ビバ・タケオ！ 「図書」一九八〇年五月号  
 NHK幹部諸君に註文する①―併せて日放勞諸君にも  
 「マスコミ市民」一九八〇年五月号  
 惜別、吉川幸次郎君 「学燈」一九八〇年五月号  
 ⑧  
 NHK幹部諸君に註文する②―朝鮮語講座とNHK  
 「マスコミ市民」一九八〇年六月号
- 『パニヤン』（英米文学評伝叢書12、研究社出版、一九  
 八〇年六月刊） 一九三四年、研究社版の復刻版）  
 コンスタンティヌス大帝 「くりま」一九八〇年夏季  
 号 七月 ⑦  
 不可解な光州の軍事制圧 「世界」一九八〇年九月  
 号  
 司馬江漢雜考（一）まえがき 「新潮」一九八〇年  
 九月号  
 私情、偏見もまた尊し 『断腸亭日乗』内容見本  
 （岩波書店、一九八〇年九月）  
 NHK幹部諸君に註文する③―NHKの義務と責任  
 「マスコミ市民」一九八〇年十月号  
 背教者ユリアヌス帝 「くりま」一九八〇年秋季号  
 十月 ⑦  
 司馬江漢雜考（二）山領主馬と江漢書簡（一） 「新  
 潮」一九八〇年十一月号  
 改憲論議への視角 「朝日新聞」一九八〇年十一月  
 二十日  
 一九八一（昭和五十六）年 七十八歳

物書き不心得帖 「言語生活」一九八一年一月号

司馬江漢雜考(三) 山領主馬と江漢書簡(二) 「新

潮」一九八一年一月号

司馬江漢雜考(四) 山領主馬と江漢書簡(三) 「新

潮」一九八一年二月号

学問的良心的な業績 「世界古典文学全集」内容見

本(筑摩書房、一九八一年二月)

哀惜―市川さんのこと 「マスコミ市民」一九八一

年三月号

司馬江漢雜考(五) 山領主馬と江漢書簡(四) 「新

潮」一九八一年四月号

△反古ぶくろ▽ 「英語青年」第一二七卷一号―

二八卷十二号〓一九八一年四月―一九八三年三月

現実的という言葉がはやるとき 「朝日新聞」一九

八一年五月十四日 ④

吉野源三郎氏のこと 「みすず」一九八一年六月号

司馬江漢雜考(六) 山領主馬と江漢書簡(五) 「新

潮」一九八一年六月号

ひとり生まれて、ひとり死す…… 「朝日ジャーナ

ル」一九八一年六月十二日号

吉野さんと「世界」 「世界」一九八一年八月号

司馬江漢雜考(七) 幕間閑談のこと(一) 「新潮」

一九八一年八月号

司馬江漢雜考(八) 江馬春齡と江漢書簡(一) 「新

潮」一九八一年十月号

大宅壮一君とのつきあい 『大宅壮一全集』第七卷

(蒼洋社、一九八一年十月刊) 月報

司馬江漢雜考(九) 江馬春齡と江漢書簡(二) 「新

潮」一九八一年十二月号

われら、何をなすべきか 『危局を読む』(労働旬報

社、一九八一年十二月刊)

一九八二(昭和五十七)年 七十九歳

15年 「友」第一四九号〓一九八二年一月

お願い、一つ 「マスコミ市民」一九八二年二月号

司馬江漢雜考(十) 江馬春齡と江漢書簡(三) 「新

潮」一九八二年二月号

TV文化のある盲点 「マスコミ市民」一九八二年

三月号

中野好夫記念文庫『沖繩資料センター目録』(法政大

学沖繩文化研究所、一九八二年三月刊)

『中野好夫先生に聞く』（アメリカ研究資料センター、

一九八二年三月刊）

司馬江漢雜考（十一）江馬春齡と江漢書簡（四）

「新潮」一九八二年四月号

ミレーの晩鐘 「学燈」一九八二年四月号

『物好きたち』の反核 「読売新聞」一九八二年四月

六日

△アンケート・文学者の反核声明△私はこう考える▽

「すばる」一九八二年五月号

司馬江漢雜考（十二）幕間閑談のこと（二） 「新潮」

一九八二年六月号

『人は獣に及ばず』（みすず書房、一九八二年六月刊）

司馬江漢雜考（十三）考証・土田吉次郎について

「新潮」一九八二年八月号

怒りを過ぎての情けない話 「朝日新聞」一九八二年

八月五日 ④

師恩・学恩、五十年 「英語青年」第一二八卷八号

一九八二年十一月

司馬江漢雜考（十四）海保青陵宛書簡、その他 「新

潮」一九八二年十一月号

司馬江漢雜考（十五）海保青陵宛書簡 「新潮」一

一九八二年十二月号

主人公のいない自伝 「朝日新聞」一九八二年十一

月二十二日―十二月二十八日

序 成瀬不二雄著『百富士』（毎日新聞社、一九八

二年十一月刊）

一九八三（昭和五十八）年 八十歳

国家とは何物なのか 「沖繩タイムス」一九八三年

一月四日

司馬江漢雜考（十六）堀内林哲宛書簡二通 「新潮」

一九八三年二月号

NHK当局に問う―テレビの私宅取材について

「マスコミ市民」一九八三年四月号

司馬江漢雜考（十七）大塚藤蔵、軍蔵宛書簡 「新

潮」一九八三年四月号

司馬江漢雜考（十八）浦上玉堂宛書簡、その他 「新

潮」一九八三年六月号

『中野好夫集』（『現代の随想』第二十五卷、彌生書房、

一九八三年六月刊）

司馬江漢雜考（完）むすび 「新潮」一九八三年八

月号

ノウゼンカズラ 『百人一樹』下(書房「樹」、一九八三年十一月刊)

ピラネージとニューゲイト牢獄 「ガレリア通信」

第二十一号 一九八三年十二月

一九八四(昭和五十九) 一八五年 八十一歳

口は禍の門——忘れたころの古い作文 「新潮」一

九八四年一月号

△中野好夫氏に聞く▽夕べの雑談 「ちくま」一九

八四年一月号

『中野好夫集』全十一卷(筑摩書房、一九八四年一月

から刊行、一九八五年八月完結)

利潤追求の犠牲に——新石垣空港建設 「沖繩タイ

ムス」一九八四年三月十三日

ラムと庄野君のこと 「文学界」一九八四年五月号

装飾壁画の魅力 「歴史読本」一九八四年七月号

東三郎のモデルについて 『中野好夫集』第十卷(筑

摩書房、一九八四年九月刊)

遠い発音 「那須」第六十九号(那須ゴルフ倶楽部

発行) 一九八四年十月

△推薦文▽ 北小路健著『古文書の面白さ』(新潮社、一九八四年十一月刊)カバー

小説「黒い眼と茶色の目」〔正誤註〕 『中野好夫集』

第十一卷(筑摩書房、一九八四年十二月刊)

面目一新、新版を期待する 「英語青年」第一三〇

卷十一号綴込 一九八五年二月(一九八四年秋執

筆)

あるブラック・ヒューマー 「SCOPE」一九八五

年二月号

\*

『蘆花日記』全七卷(監修、筑摩書房、一九八五年六

月から刊行)

地方自治の望ましいあり方 「新沖繩文学」第六十

四号 一九八五年六月(一九七二年五月十六日、沖

縄県主催の沖繩復帰記念講演会での講演)

『主人公のいない自伝』(筑摩書房、一九八五年七月刊)

『司馬江漢考』(新潮社、一九八六年二月刊)

小宮正弘編